愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第193集

中山砦跡

2015

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 193 集

中山砦跡
（なかやまとりであと）

2015

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

中山砦跡の所在する愛知県新城市は、平成 17 年 10 月 1 日に愛知県の東部を流れる豊川中流域に位置する新城市に旧南設楽郡鳳来町と旧作手村が合併して現在に至る市であります。古くからの豊川の水運と現在に至る交通路が愛知県の三河地域内はいうまでもなく、長野県南部や静岡県遠江地域とも結ばれた地勢を反映して、政治・文化が営まれてきた地域であります。

この度報告いたします中山砦跡は、日本史上にも著名である長篠城・設楽ヶ原合戦の舞台となる乗本五砦の一つであり、戦国時代を語る上で欠かすことができない遺跡であります。この発掘調査により、戦国時代の遺構と遺物が確認され、乗本五砦の実在した姿を証明することができたことは、戦国時代の戦いを考える上でも貴重な資料になったものと思われます。本書の調査成果が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関する御理解を深める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々をはじめ，関係者及び関係諸機関の御理解と御協力を頂きましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成２７年３月

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長　伊　藤　克　博

例　言

1. 本書は愛知県新城市乗本に所在する中山砦跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線建設に伴う事前調査として、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、範囲確認調査が平成 19 年 5 月から 6 月までに実施した。発掘調査は平成 22 年 6 月から平成 22 年 9 月までで、発掘調査面積は 2,830㎡である。整理および報告書作成作業は平成 25 年 4 月から平成 26 年 3 月にかけて実施した。
4. 調査担当者は、範囲確認調査が宮腰健司（本センター統括専門員）・岡久雅浩（本センター調査研究員・現岡崎北高等学校）、発掘調査が松田　訓（本センター調査研究専門員）・蔭山誠一（本センター調査研究主任）である。発掘調査は、株式会社島田組の支援を受けた。
5. 調査にあたっては、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、新城市教育委員会をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の編集は蔭山誠一が担当した。
7. 整理作業は蔭山誠一が担当した。整理作業は阿部裕恵・木下由貴子（整理補助員）の協力を得て実施した。また、写真撮影を写真工房遊（金子知久）に委託して実施した。
8. 本書に提示した座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。海抜表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
9. 遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
10. 写真や図面等の調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
    〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4161）
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
    〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4164）
12. 本書の作成に至るまでに、本センター専門委員・職員をはじめとして下記の方々から多くのご指導とご助言を受けている。記して感謝したい。（五十音順：敬称略）
    愛知中世城郭研究会・長篠城址史跡保存館・阿部伊三夫・石川浩治・岩山欣一・奥田敏春・高田　徹・津野　仁・山内祥三

目　次

第１章　前　言

第１節　調査の経緯と方法…… 1

第２節　中山砦跡の立地…… 2

第３節　長篠城跡周辺の陣所・砦跡…… 2

第４節　合戦時の乗本五砦の状況…… 3

第２章　遺構と遺物

第１節　基本層序…… 4

第２節　10A 区の遺構　…… 4

第３節　10B 区の遺構　…… 8

第４節　鉄鏃…… 18

第３章　総　括

第１節　中山砦跡の遺構について…… 19

第２節　中山砦跡出土の鉄鏃について…… 19

第３節　まとめ…… 20

付　論　長篠城址史跡保存館保管の鉄鏃・鉄槍

第１節　はじめに…… 24

第２節　長篠城址史跡保存館保管の資料…… 24

第３節　鉄鏃・鉄槍の特徴…… 27

第４節　まとめ…… 27

写真図版

遺構：写真図版 1 ～写真図版 11

鉄鏃：写真図版 12

抄　録

挿図・写真目次

図 1　中山砦跡位置図 …… 1
図 2　中山砦跡の調査区の位置と周辺の城・陣所・砦跡 (1:20,000)…… 2
図 3　中山砦跡発掘調査前地形測量図（1:1,000） 5
図 4　10A 区平面図（1:500） …… 6
図 5　10A 区セクション図 1(1:100) …… 7
図 6　10A 区セクション図 2(1:100) …… 9
図 7　10A 区セクション図 3(1:100) …… 10
図 8　10A 区セクション図 4(1:100) …… 11
図 9　10A 区 01SA・02SD・03SK ～ 05SK(1:100) …… 12
図 10　10A 区 01SA・02SD・03SK・11SD・12SX(1:100) …… 13
図 11　10A 区個別遺構断面図 1(1:100)…… 14
図 12　10A 区個別遺構断面図 2(1:100)…… 15
図 13　10B 区平面図 (1:250) …… 16
図 14　10B 区セクション図 (1:200) …… 16
図 15　10B 区個別遺構断面図 (1:100) …… 17
図 16　鉄鏃実測図 (1:1)…… 18
図 17　中山砦跡縄張り図 …… 19
図 18　戦国時代における東海地方の鉄鏃 1(1:4) 21
図 19　戦国時代における東海地方の鉄鏃 2(1:4) 22
図 20　長篠城址史跡保存館保管の鉄鏃 (1:2)…… 25
図 21　長篠城址史跡保存館保管の鉄槍 (1:2)…… 26

写真 1　地元説明会の状況…… 1

第1章　前　言

第１節　調査の経緯と方法

中山砦跡は愛知県新城市乗本に所在する遺跡で（図1）、JR飯田線鳥居駅より東約1.0kmの地点に位置する。本遺跡は埋蔵文化財包蔵地一覧に中山砦跡（県遺跡番号773019）として周知の遺跡として知られており、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所による第二東海自動車道横浜名古屋線建設に伴い、遺跡の事前調査をする必要性が認められた。そこで愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室から委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターによる範囲確認調査が平成19年5月から6月にかけて行われた結果、出土遺物はないものの、堀状遺構と土塁状遺構が確認された。この為、第二東海自動車道横浜名古屋線建設事業に先立って発掘調査が計画され、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが平成22年6月から平成22年9月にかけて、発掘調査を実施した。

調査面積は2,830㎡で、調査地点は第二東海自動車道横浜名古屋線路線内にかかる丘陵尾根地点を中心に、南側丘陵において東西約140mの範囲にわたる10A区、北側丘陵において東西約25mの範囲にわたる10B区の２ヶ所の調査区で実施した（図2）。

発掘調査の工程は、10A区を平成22年6月7日～

写真１　地元説明会の状況

同年9月17日に、10B区を平成22年8月17日～同年9月17日である。発掘調査の終了後、平成25年度に出土遺物の整理作業と報告書作成を行った。

調査方法は全て人力掘削により表土となる腐植土層とその影響を受けたと思われる地層を除去した後、遺構検出、遺構検出状況の写真撮影、人力による遺構掘削、遺構の完掘状況の写真撮影、遺構の測量と観察などを行なった。

遺跡の地元説明会を平成22年9月12日（日）に実施し、74名の参加者を得た。また平成22年5月9日（日）に愛知中世城郭研究会（11名）の見学、新城市立長篠小学校六年生の生徒による発掘調査現場の見学があった。

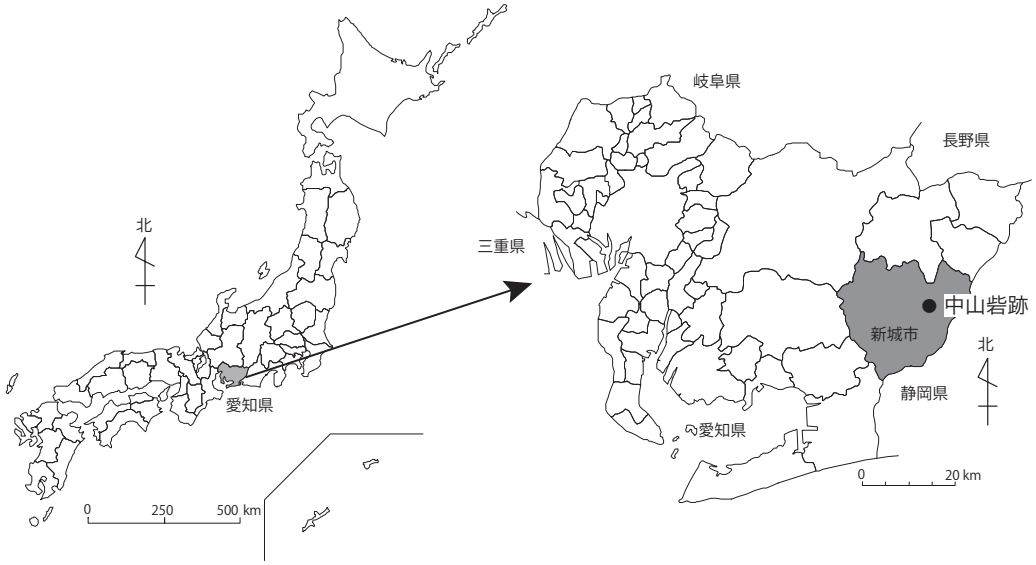


図１　中山砦跡位置図

図２　中山砦跡の調査区の位置と周辺の城・陣所・砦跡（1:20,000）

第２節　中山砦跡の立地

中山砦跡は、新城市の東部に位置し、地形的には、豊川が北西から流れる寒狭川と北東から流れる宇連川の合流する地点の東岸にある天神山から派生する北西側尾根筋の先端に立地している。遺跡のある豊川東岸の地質は、三波川結晶片麻岩を基本とするもので、遺跡周辺の丘陵においても、地表面に岩の露出する箇所を散見できる。中山砦跡はこのような地形的特徴を利用した遺跡で、調査区内における遺構検出面は標高 100m から 120m で､谷からの標高差は約 40m である。中山砦跡からの眺望は、遺跡の北西約 500m の宇連川の西岸に国史跡の長篠城址を見下ろすことができ、西約 3km にある設楽ヶ原決戦場を望むことができる。

第３節　長篠城跡周辺の陣所・砦跡

中山砦跡は、長篠・設楽ヶ原合戦の長篠城攻防戦の為に築かれた乗本五砦の一つで、永正五年（1508）に今川氏親の影響下で菅沼元成が築城した長篠城跡を攻撃する際の砦として利用されたものである。文献からは徳川家康が天正元年（1573）７月に長篠城跡を武田氏方から奪還する際に、南に隣接する久間山砦跡とともに築かせたと伝えられる。その後武田勝頼が天正三年（1575）５月に奥平貞昌が守る徳川氏方の長篠城跡を攻める際に、長篠城跡の北にある武田勝頼本陣とされる医王寺山武田勝頼陣所跡と武田信豊・馬場信房等が陣をおいた大通寺山陣所跡、一条信竜・真田信綱等が陣をおいた天神山陣所跡、長篠城跡から宇連川を挟んだ東岸に北から姥ヶ懐砦跡・君ヶ伏床砦跡・鳶ヶ巣山砦跡・中山砦跡・久間山砦跡を設け、陣を置いたとされる。これらの砦・陣所跡は発掘調査による検証はなされていないが、医王寺山武田勝頼陣所跡と大通寺山陣所跡は比較的大規模な平場が現在でも確認できる。宇連川東岸にある五砦跡に関しても、姥ヶ懐砦跡・君ヶ伏床砦跡・鳶ヶ巣山砦跡・中山砦跡・久間山砦跡においても平場が確認できるが、近代以後の地形改変も多くみられるようであり、現在残る平場などが全て当時の姿を伝えているのかは不明である。これらの砦・陣所跡は、長篠城跡から最も遠い君ヶ伏戸砦跡が約 1300m 離れているが、その他は約 500m ～ 750m 離れた地点にあり、現在の樹木がなければ、長篠城跡が一望できる位置にある。

第4節　合戦時の乗本五砦の状況

1994年に刊行された『鳳来町誌』第4章において竹下弘氏によりまとめられた「長篠の戦い」では、旧陸軍参謀本部が明治時代に編纂した『日本戦史.長篠役』を参考にした「長篠城攻め武田軍の配置」として、

本陣医王寺山　武田勝頼、同信友・信光、望月信雅等　三〇〇〇人
同　後方　甘利信康、小山田信茂、跡部勝資等　二〇〇〇人
大通寺山　武田信豊、馬場信春、小山田昌行等　二〇〇〇人
水上山（天神山）　一条信竜、真田信綱、同昌輝、土屋昌次等　二五〇〇人
岩代方面　内藤昌豊、小幡信貞等　二〇〇〇人
篠場野　武田信廉、穴山信君、原昌胤、菅沼定直（定忠）等一五〇〇人
有海村　山県昌景、高坂昌澄等遊軍　一〇〇〇人
鳶が巣山　武田信実、小見山信近等　五〇〇人
姥が懐　三枝守友、同守義・守光、草刈隼人助、穴戸大膳等　四五〇人
君が伏床　和田信業、長竹昌基、反町大膳等　三〇〇人
中山　名和宗安、飯尾助友、同祐国、名和田晴継、五味貞氏等　五二〇人
久間山　和気宗勝、大戸直光、倉賀野秀景、原胤成等　六〇〇人

とあり、先に述べた砦・陣所跡では、医王寺山武田勝頼陣所跡と大通寺山陣所跡、天神山陣所跡では2000名を超える兵が配置され、長篠城址の北西の寒狭川（豊川）左岸に陣をおいたとされる岩代方面や長篠城址から寒狭川を挟んだ右岸の東においた有海村と篠場野の陣の兵の数より多く、武田氏の軍の主力である。また長篠城址から宇連川を挟んだ東岸にある姥ヶ懐砦跡・君ヶ伏床砦跡・鳶ヶ巣山砦跡・中山砦跡・久間山砦跡は兵の数が300名～600名で、長篠城址を囲む押さえのような配置と思われる。只、興味深いのは現在残る平場等の調査では、北側にある姥ヶ懐砦跡・君ヶ伏床砦跡・鳶ヶ巣山砦跡が南側にある中山砦跡・久間山砦跡より明らかに平場等の数や広がりが大きいが、配置された兵の数は南側の中山砦跡・久間山砦跡の方が多く、この記録からみると合戦時には、小さい砦跡と思われる久間山砦跡や中山砦跡に重要性が高く読み取れる。

これらの砦・陣所跡は、天文三年（1575）5月8日の武田氏による長篠城跡の攻撃から始まり、同年5月21日の連吾川を挟んだ決戦において武田氏が敗退するまで使用されたと思われる。この短い期間であるが、鳶ヶ巣山砦跡では、『信長公記』には小屋の存在が記されており、砦・陣所跡にも小屋や柵などが設けられていた可能性が高い。長篠城跡の南東を囲む押さえの役割である中山砦跡をはじめとする乗本五砦が歴史に特に名を残すのは、織田信長の命令により派遣された徳川方の酒井忠次軍による松山峠越えの奇襲作戦による。この作戦の成功は、長篠城跡の武田軍による包囲を解くものであり、織田・徳川軍の勝利を確定するものになったとされる。乗本五砦に関する研究などは多くあるが、1933年に刊行された柿原明十による『鳶が巣砦奇襲と合戦問答　長篠合戦記』に詳しい。

参考文献

柿原明十 1933『鳶が巣砦奇襲と合戦問答　長篠合戦記』(昭和60年長篠役鳶ヶ巣陣戦没将士之墓碑建設会より復刊)
太田牛一著・桑田忠親校注 1979『改訂信長公記』株式会社新人物往来社
新城市誌編集委員会 1963『新城市誌』愛知県新城市
鳳来町教育委員会編 1994『鳳来町誌』歴史編、愛知県南設楽郡鳳来町
高田　徹 1996「三河長篠城及び長篠合戦陣所群に関する検討」『中世城郭研究』創刊10周年記念号 第10号、中世城郭研究会
梅本博志・安藤義弘編 1997『愛知県中世城館跡調査報告』Ⅲ（東三河地区）愛知県教育委員会
岩山欣司 2005『史跡長篠城跡』(Ⅳ)「鳳来町埋蔵文化財調査報告書第4集」鳳来町教育委員会
他にも、長篠・設楽ヶ原合戦に関する文献資料、調査・研究は多数あるが、全てを管見できておらず、十分に検討できていない部分も多い。

第2章　遺構と遺物

第1節　基本層序

遺跡の基本層序は、東から西へのびる丘陵の南側の丘陵上にある10A区と北側の丘陵上にある10B区の地点があるが、どちらの地点も基本的に同様な堆積状況であり、地表面から深さ0.05m～0.20mで地山である片麻岩からなる岩盤と片麻岩が風化してできた黄褐色シルトにいたる。地表面の腐植土とその影響の度合いにより10A区の東丘陵側の地点では3ヶ所分層できたが、その他の地点では地表面と地山の間は基本的に1層で、地表面にある腐植土と腐植土からの影響を受けた黄褐色シルトがあまり分層できない状態で堆積していた。この堆積中には地山である片麻岩から派生した礫が多数含まれた。

第2節　10A区の遺構

戦国時代の堀切2条（10A区02SD・11SD）と土塁1条（10A区01SA）があり、比較的新しい時代のものと考えられる土坑3基（10A区03SK～05SK・10SK）と平場遺構4面（10A区06SX～09SX）が確認できた。

01SA：10A区の東側に位置する丘陵尾根に対して直角に設けられた土塁で、最大幅4.5m、確認できる南北の長さは12m程である。高さは西の平場である07SXから0.75m、東の堀切である02SD・11SDの上端から1.20mで、丘陵尾根の頂部付近に最高点があり、標高118.75mをはかる。01SAは発掘調査前から01SAの頂部に腐植土がなく、地山の岩盤層が風化したと考えられる風化した小礫を若干含む明赤褐色シルト層の上に盛土の可能性のある黄褐色シルト層の堆積が0.20m～0.28mみられた。地山と盛土を分けた根拠は、色調の違いで、色調の違いを反映すると考えられる腐植土の影響の度合い（色調の濁りや灰色化）と地山の風化度の違い（黄橙色から黄色への変化）により分類した。また分層した堆積が、01SAの下部の地山は東側の02SD・11SD側に下がる傾斜をもつのに対して、01SAの上部の2層は水平方向に及んでいた。この盛土の可能性のある黄褐色シルト層は腐植土の影響度合いにより、2層に分層でき、上層の堆積の方が人為的盛土の可能性が高く、下層は地山の可能性も残る。

02SD・11SD：01SAの東に並行する位置にある幅1.2m～2.0mの南北溝で、10A区の丘陵を西と東に分ける。溝は1度の掘り直しが確認でき、始めに掘られた溝が11SDで、後に掘り直された溝が02SDである。11SDは地山の岩盤層まで掘削した溝底の幅が0.4m前後ある断面「V」字状の形で、溝底の標高は116.5m前後にあり、01SAの頂部との比高差で、2.25m程である。02SDは11SDの01SAがある西側に「V」字状の断面の形で掘削されており、溝底は11SDより0.1m程高い。02SDと11SDの北端部分は11SDの底面から0.50m程、地山が掘り残された部分12SXがあった。溝の埋土は11SDの方が02SDより灰色化の濁りが少なく明るい色調で、11SDの埋土は明褐色～黄褐色シルトにやや大きめの小礫まで多数含まれるもの、02SDの埋土は黄褐色～にぶい黄褐色シルトで風化した小礫を含むものであった。

03SK：02SDの上から掘り込まれた土坑で、発掘調査前から開口しており、現代に近い落とし穴か戦国時代の砦に伴う井戸の可能性が考えられた。土坑の埋土の上層からビール瓶が1本出土した。平面は径1.60mの円形で、深さは2.50mであった。埋土は標高115.70m付近まで埋没しており、埋土の上層0.30mは落葉と腐植土の堆積、中層の0.35mは小礫混じりのオリーブ褐色シルトと地山起源のにぶい黄褐色シルトブロック状の堆積、下層の0.35mは黄褐色シルトを主体に地山の褐色シルトと岩盤層の剥片が入る堆積であった。

04SK・05SK：04SKと05SKは02SD内の03SKの南と北にある土坑で、発掘調査前の現況においても、凹みが確認できた。遺構の規模は、04SKが南北2.50m、東西1.75m、深さ0.10m、05SKが長径4.75m、短径2.00m、深さ0.16mである。埋土はどちらも地表面付近の腐植土の影響を受けた黄褐色シルトで、05SKの

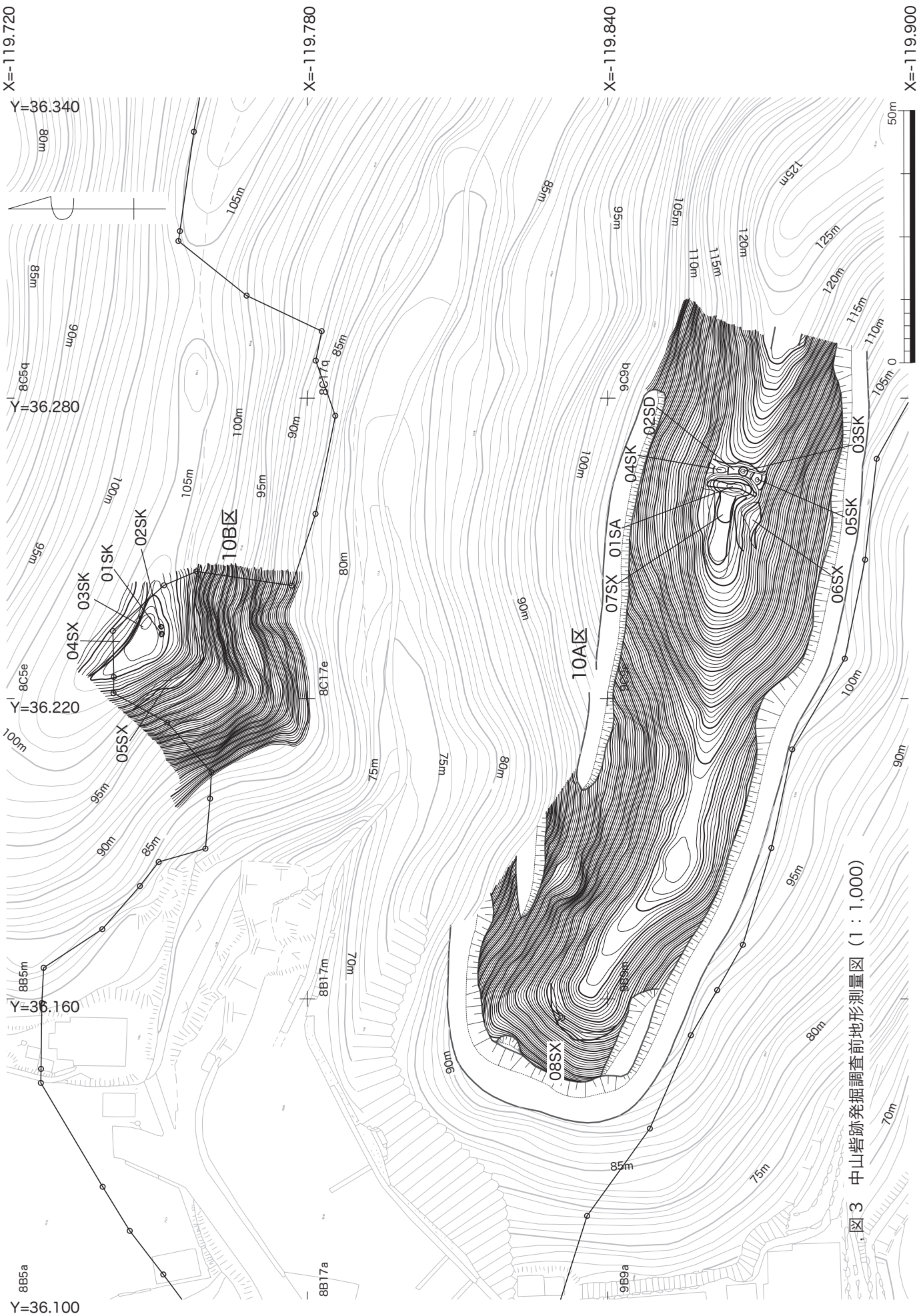


図3　中山砦跡発掘調査前地形測量図（1：1,000）

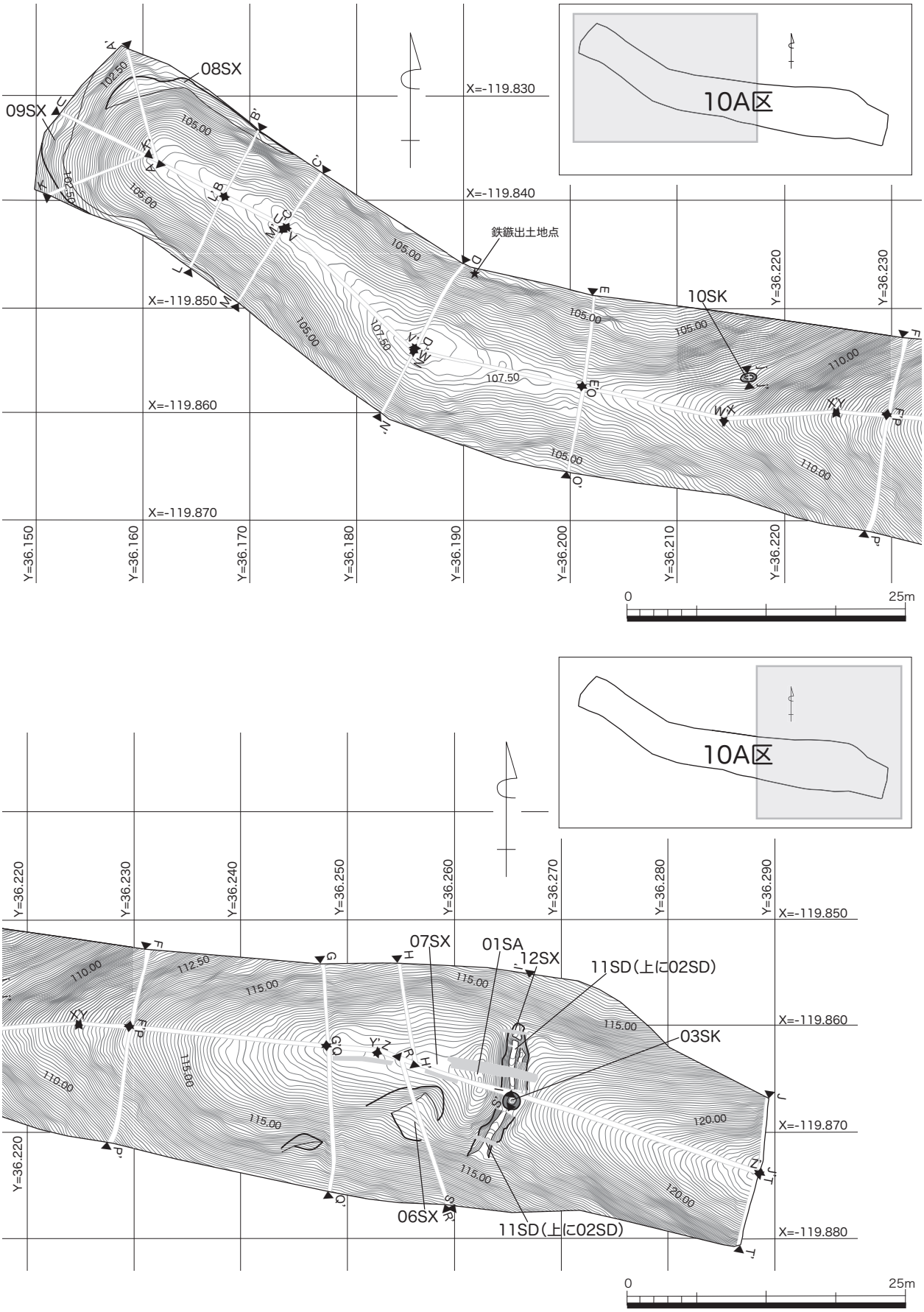
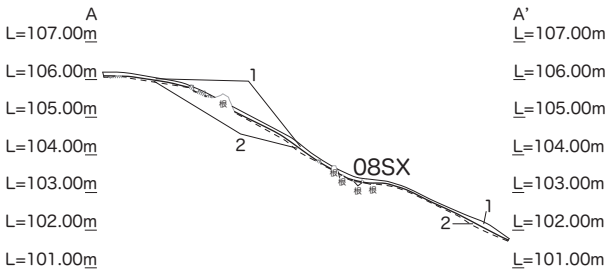
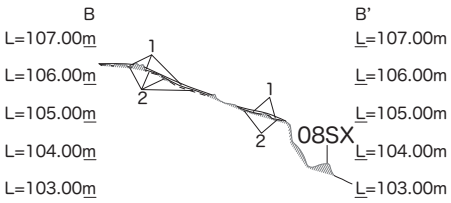


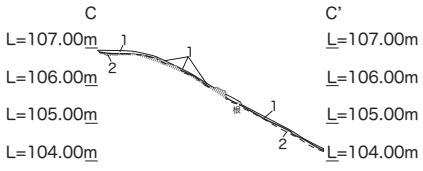
図 4　10A 区平面図（1:500）



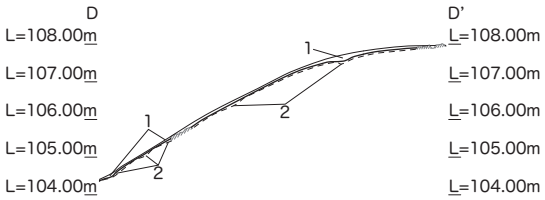
1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片（石英・長石・片岩）を多く含み、
5cm～10cm大の礫（片岩）を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層（地山）部分的に岩盤層が露頭している。



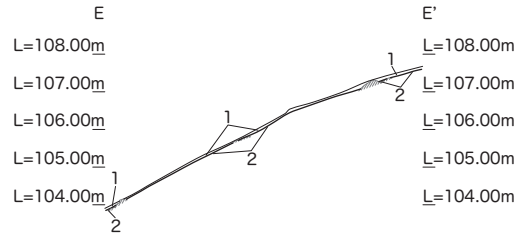
1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片（石英・長石・片岩）を多く含み、
5cm～10cm大の礫（片岩）を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層（地山）部分的に岩盤層が露頭している。



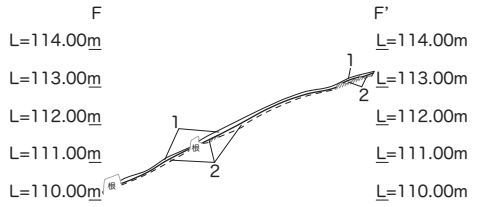
1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片（石英・長石・片岩）を多く含み、
5cm～10cm大の礫（片岩）を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層（地山）部分的に岩盤層が露頭している。



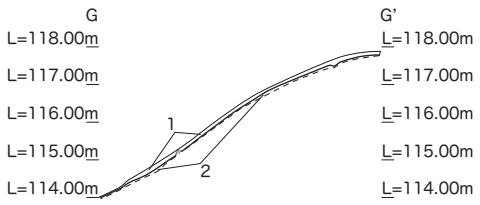
1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片（石英・長石・片岩）を多く含み、
5cm～10cm大の礫（片岩）を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層（地山）部分的に岩盤層が露頭している。



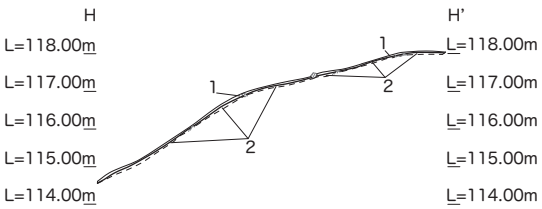
1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片（石英・長石・片岩）を多く含み、
5cm～10cm大の礫（片岩）を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層（地山）部分的に岩盤層が露頭している。



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片（石英・長石・片岩）を多く含み、
5cm～10cm大の礫（片岩）を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層（地山）部分的に岩盤層が露頭している。



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片（石英・長石・片岩）を多く含み、
5cm～10cm大の礫（片岩）を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層（地山）部分的に岩盤層が露頭している。



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片（石英・長石・片岩）を多く含み、
5cm～10cm大の礫（片岩）を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層（地山）部分的に岩盤層が露頭している。

図5　10A 区セクション図 1（1:200）

埋土では焼土や炭が多量に含まれていた。05SK の底面では焚き火の跡と思われる径 1.5m ～ 1.6m の範囲で強い被熱を受けた痕跡があった。また 05SK からアルミ製の皿が出土した。この２基の土坑は 03SK の周囲 0.5m ～ 1.0m を残して 02SD の中を掘り下げたもので、10A 区の尾根を下りてきた動物を 03SK のある掘り残し部に誘導する堀込みと考えられ、03SK の落とし穴に動物を落とす為の仕掛けに関連するものと考えられる。

06SX：01SA の南西側で、丘陵尾根側を高さ 1.0m 程掘り込んで形成された平場跡で、東西 7.0m。南北 5.0m 程の規模をはかる。埋土は表土である腐植土とその影響を受けた黄褐色シルトの堆積があるのみであった。平場となる 06SX において、関連する遺構や遺物は確認できなかった。06SX の南西 7m 付近にある小さい平場も 06SX との関係が想定され、南西にある人家から尾根に登ってくる上り道であった可能性がある。

07SX：01SA の西にある平場で、東西約 10m、南北 3m 前後の規模をはかる。埋土は地表面にある腐植土と腐植土の影響を受けた黄褐色シルトのみ堆積していた。

08SX・09SX：08SX は 10A 区の西側先端付近から南側斜面にかけて、東西 21.5m に及んで確認できた帯曲輪状の平場で、標高 10150m ～ 103.50m 付近に幅 0.5m ～ 2.0m の緩斜面が確認できた。この平場は発掘調査前から確認できており、09SX と同様の形態をもち、木材伐採用の作業道として形成されたものと推定できる。09SX は 10A 区の丘陵尾根先端部の先端から北側斜面に確認できた帯曲輪状の平場で、標高 103.00m ～ 103.50m 付近に幅 0.6m ～ 1.0m の緩斜面を確認した。埋土は地表面にある腐植土と腐植土の影響を受けた黄褐色シルトのみ堆積していた。

10SK：10A 区中央付近の尾根北側斜面にて確認できた土坑で、平面は長径 1.50m、短径 0.80m の楕円形であった。断面は丸底で、深さ 0.40m をはかる。埋土は上層が暗褐色腐植土、下層が地山の岩盤剝離層が堆積していた。

12SX：02SD と 11SD の陸橋にあたると思われる遺構で、02SD・11SD の北端部分で地山が 11SD の底面から 0.50m 高く掘り残されていたものである。現在残る幅は 0.50m 程である。

第３節　10B 区の遺構

戦国時代の遺構はなく、近代以後である新しい時期の遺構と考えられる土坑３基（10B 区 01SK ～ 03SK）、平場遺構４面（10B 区 04SX ～ 07SX）がある。遺物の出土もなかった。

01SK：発掘調査前の現況においても地表面が 5cm ～ 10cm 程くぼんでいた。長径 1.00m、短径 0.85m、深さ 0.60m 程の平面円形、断面袋状やや平底の土坑で、上層は枯れ葉等が分解されずに残る黒褐色腐植土で、下層は黄褐色シルトが堆積していた。

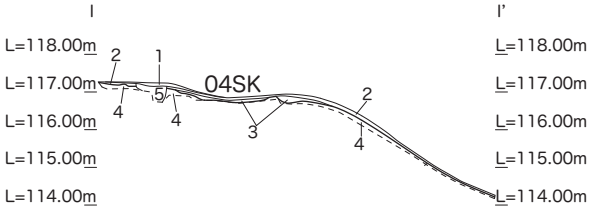
02SK：発掘調査前の現況においても地表面が 5cm ～ 10cm 程くぼんでいた。長径 0.90m、短径 0.75m、深さ 0.30m 程の平面円形、断面袋状やや平底の土坑で、上層は枯れ葉等が分解されずに残る黒褐色腐植土で、下層は黄褐色シルトが堆積していた。

03SK：発掘調査前の現況においても横穴として空洞が残存しており、穴の入り口部分にトタン板も落ちていた。長径 3.30m、短径 1.45m、深さ 1.50m の大型の土坑で、人間が入れる室状であった。埋土は上層に黒褐色腐植土が堆積しており、下層は地山の岩盤層等が崩落した黄褐色シルトや明黄褐色シルトが堆積していた。

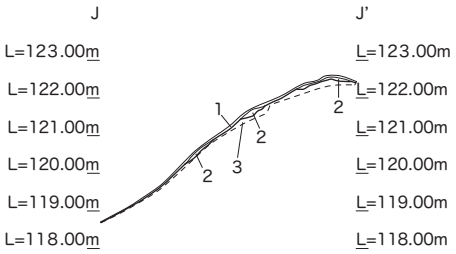
04SX：丘陵北斜面を平面菱形に削りだした平場で、平場は調査区の北にのびているが、調査区内で長径 10.0m、幅 2.5m、深さ 0.70m ～ 0.80m を測る。平場面は標高 106.50m 付近で谷がある北に少し下がって傾斜していた。埋土は上部に表土の腐植土の影響を受けたやや暗い黄褐色シルトが堆積していた。この平場に伴って 03SK は設けられたものと考えられる。

05SX：丘陵南斜面を東西の帯状に削りだした平場で、平場は調査区の外である東にのびているが、調査区内で長径 17.0m、幅 1.0m を確認した。平場面は標高 103.40m ～ 104.00m 付近で谷がある南に下がって傾斜していて、水平ではなく緩斜面である。埋土は上部に表土の腐植土の影響を受けたやや暗い黄褐色シルトが堆積していた。

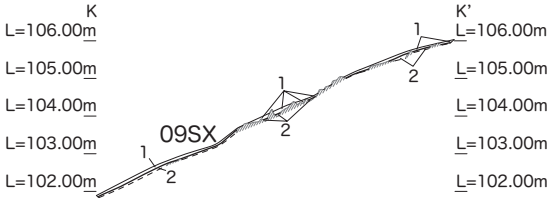
06SX：丘陵南斜面を東西の帯状に削りだした平場で、



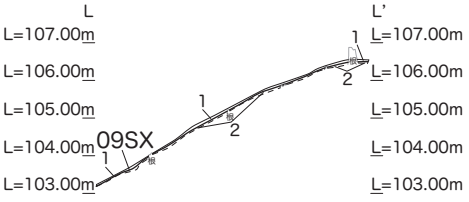
1, 撹乱(試掘壙掘削時の残土)
2, 10YR3/4 暗褐色腐植土層
3, 10YR5/6 黄褐色シルト層　径1cm～2cm大の岩盤風化礫を多量に含む。
4, 岩盤層、三波川帯の地層(白系の石英・片岩礫で構成される。)
5, 試掘埋戻土



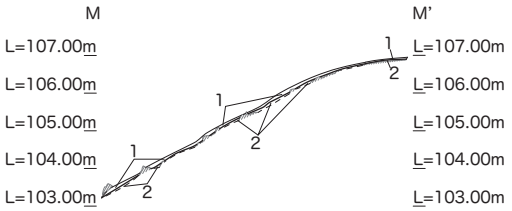
1, 10YR2/3　黒褐色腐植土層
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層
3, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)　部分的に岩盤層が露頭している。



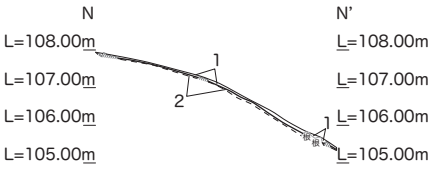
1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。



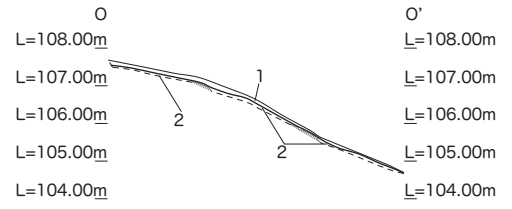
1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。



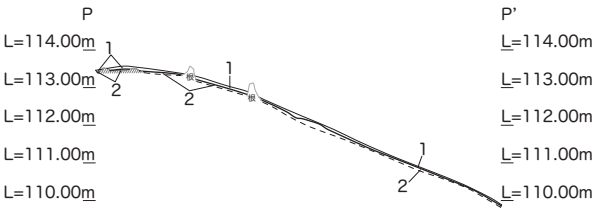
1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。

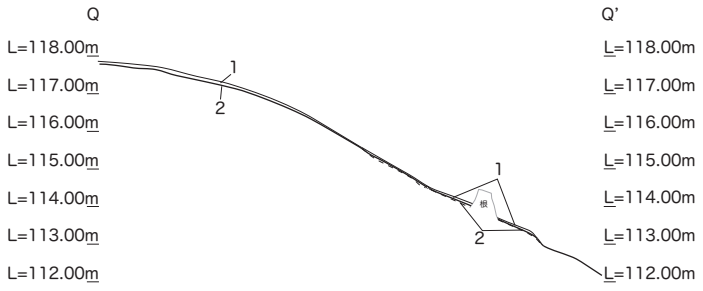


1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。

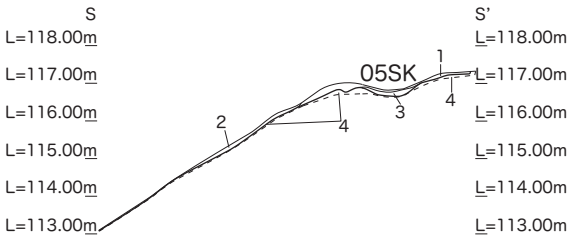


1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。

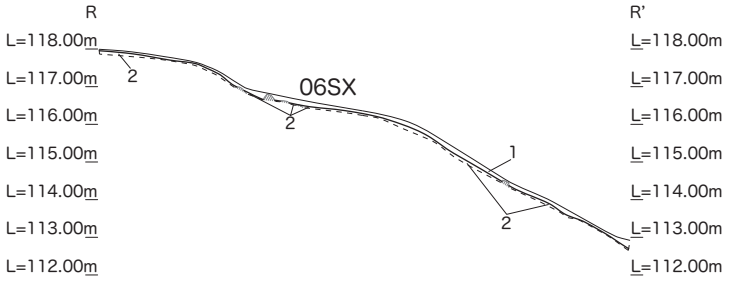
図6　10A区セクション図2（1:200）

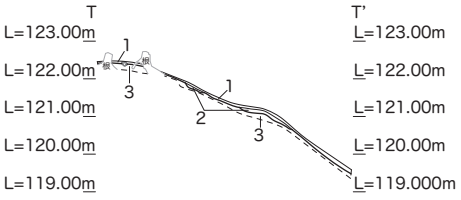


1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。



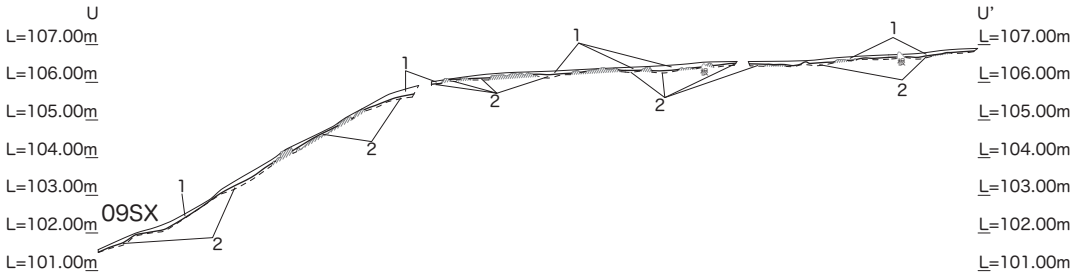
1, 10YR5/6 黄褐色シルト層　やや暗い色調を呈す、径2mm～10mm大の
岩盤風化礫を含む。
2, 10YR3/4 暗褐色腐植土層
3, 10YR5/6 黄褐色シルト層　径1cm～2cm大の岩盤風化礫を含む。
4, 岩盤層、三波川帯の地層(白系の石英・片岩礫で構成される。



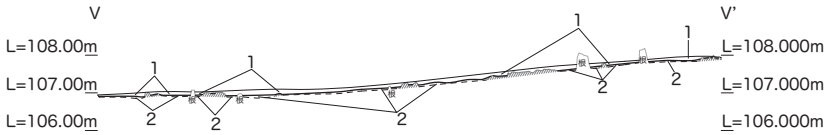


1, 10YR2/3　黒褐色腐植土層
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層
3, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)
部分的に岩盤層が露頭している。

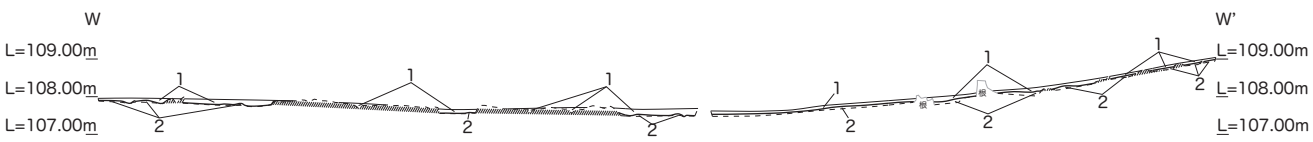
1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。



1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)　部分的に岩盤層が露頭している

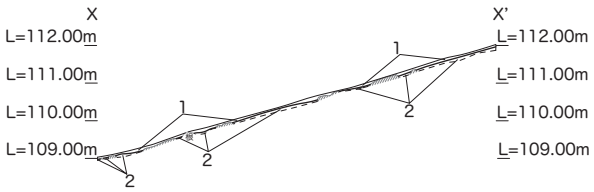


1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)　部分的に岩盤層が露頭している

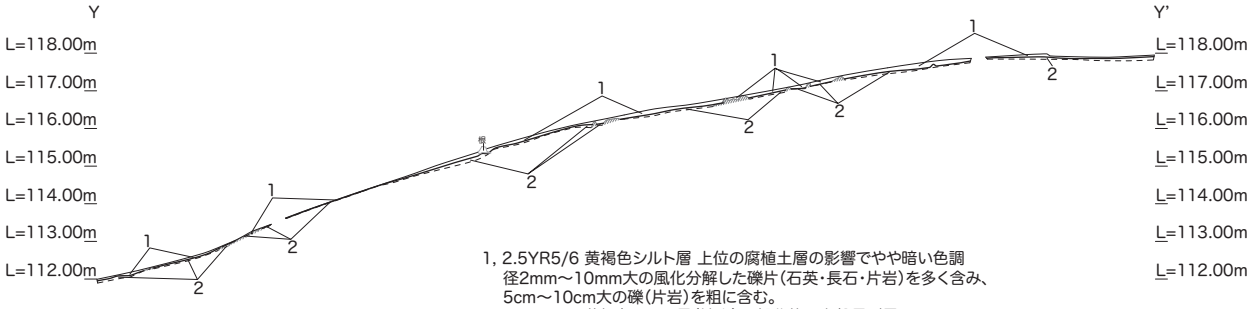


1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)　部分的に岩盤層が露頭している

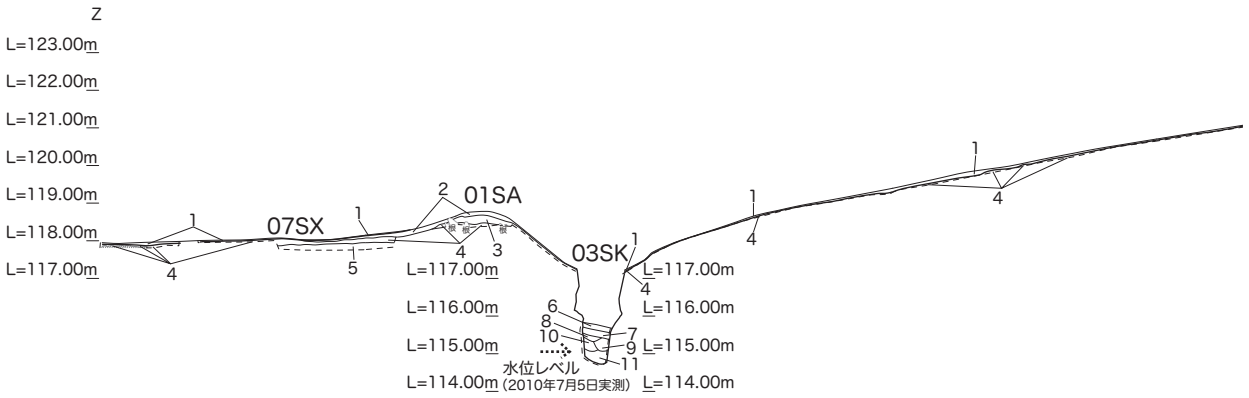
図7　10A 区セクション図 3（1:200）

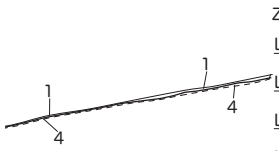


1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)　部分的に岩盤層が露頭している



1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)　部分的に岩盤層が露頭している





1,　2.5YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調　径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2,　10YR5/6　黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調　径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。(01SAの盛土の可能性あり)
3,　10YR5/6　黄褐色シルト層　2mm～10mm大の礫を主体的に含み、5cm～10cm大の礫を部分的に含む。(地山 01SAの盛土の可能性あり)
4,　2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)　部分的に岩盤層が露頭している。
5,　2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)　岩盤表層で、風化が進んでいるが、層理が認められる。
6,　落葉の堆積層　(03SEの埋土)
7,　10YR3/4　暗褐色腐葉土層　有機質に富み、径1mm以下の岩盤風化土を砂礫状に含む。(03SEの埋土)
8,　2.5Y4/3　オリーブ褐色シルト層　径3cm～0.5cmの礫を多く含み、地山上層に近い。(03SEの埋土)
9,　2.5Y4/4　オリーブ褐色シルト層　径5mm～15mm大の礫を含み、9に比してやや暗い。(03SEの埋土)
10,　10YR5/4　にぶい黄褐色の地山起源土、径1cm～3cm大の岩石片が混じる。(03SEの埋土)
11,　2.5Y5/3　黄褐色シルト層を主体としつつ7.5YR4/6褐色シルトが混じる。7.5YR4/6は基盤岩盤層に由来する剥片。(03SEの埋土)

図８　10A 区セクション図４（1:200）

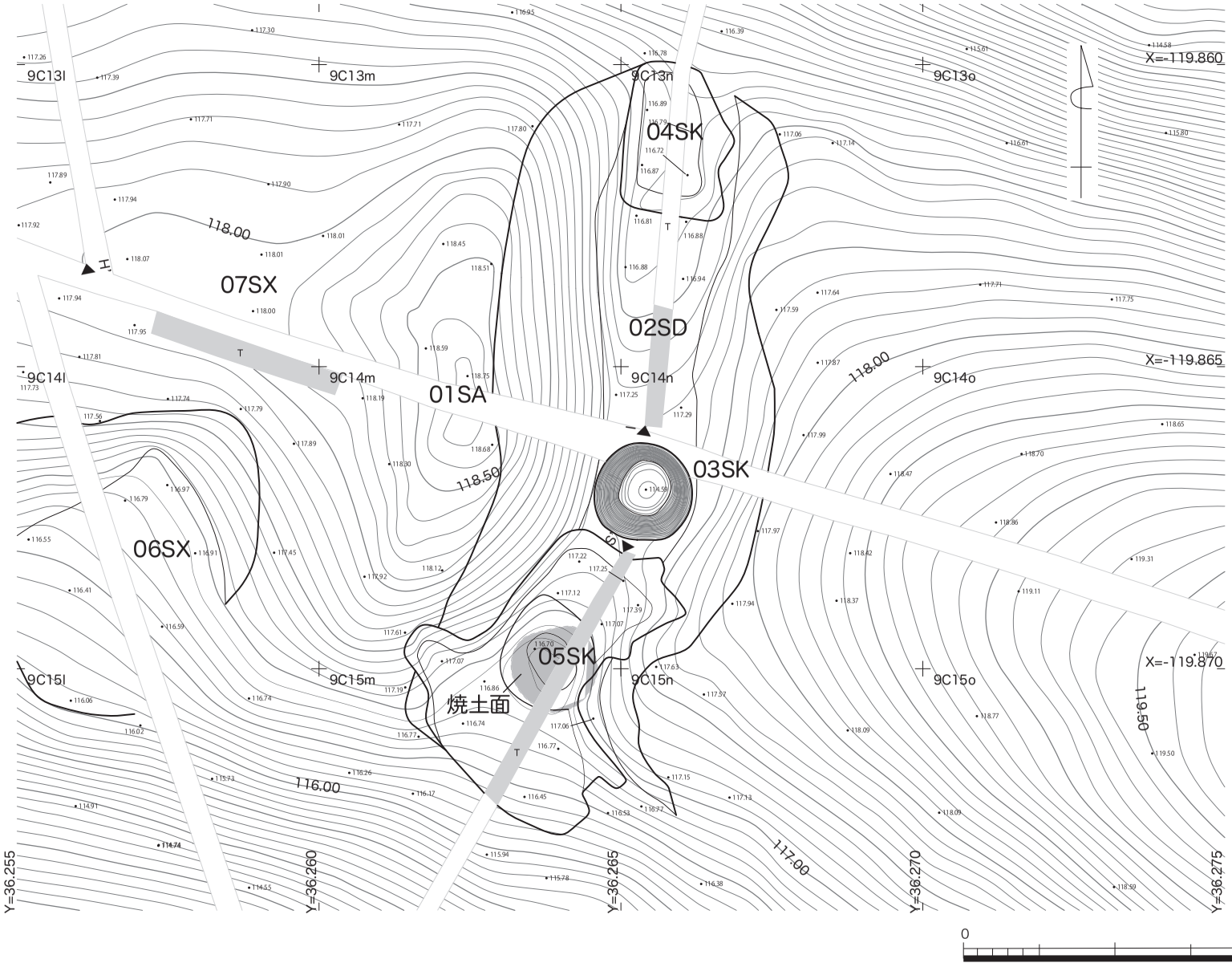


図９　10A 区 01SA・02SD・03SK ～ 05SK（1:100）

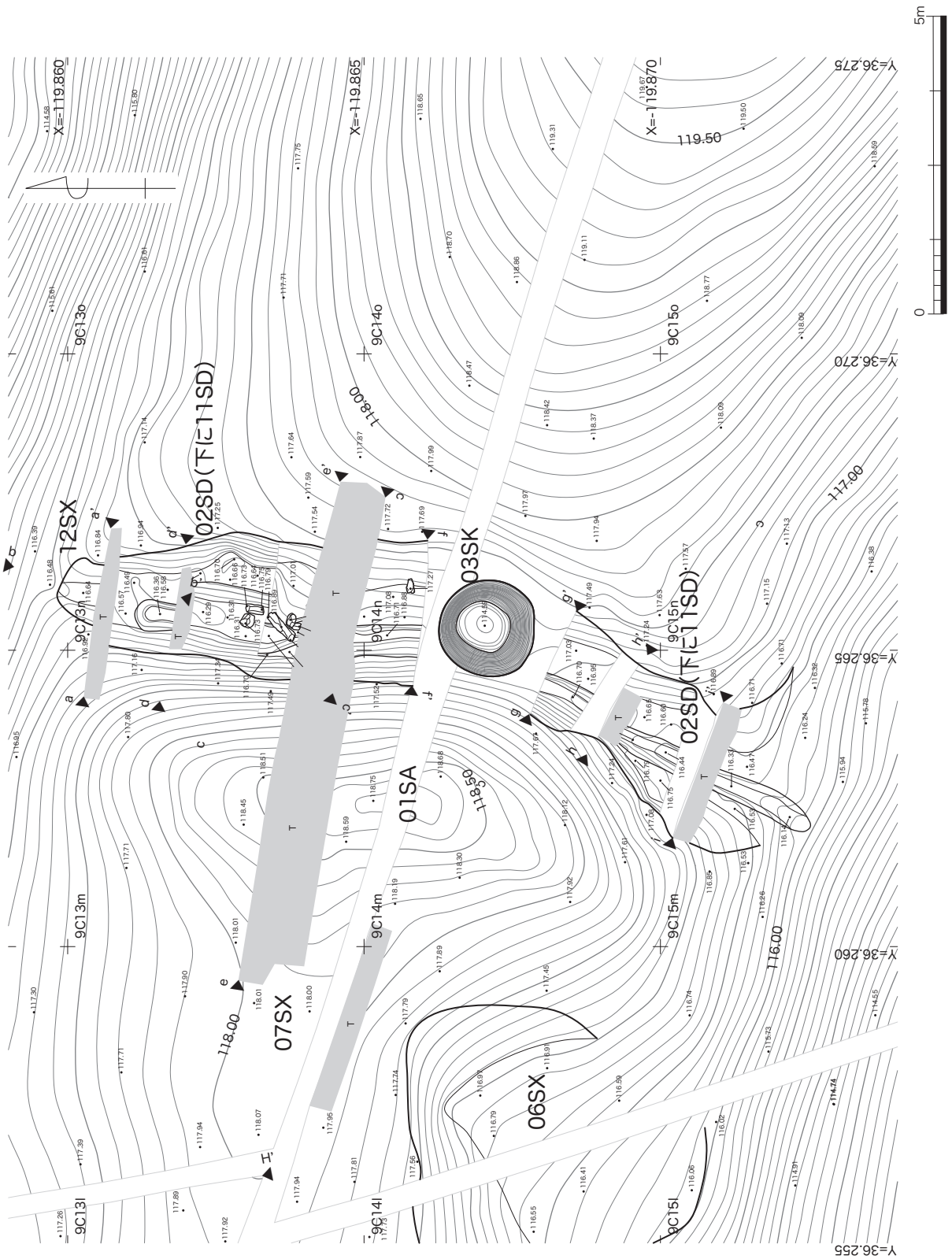
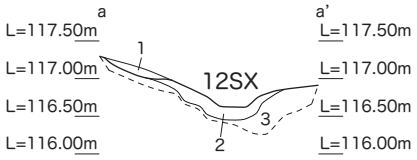
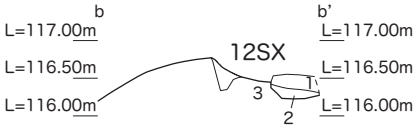


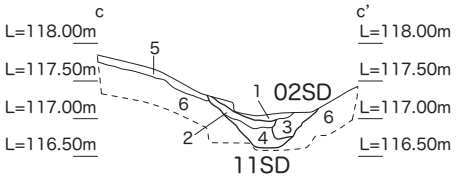
図10　10A区01SA・02SD・03SK・11SD・12SX（1:100）



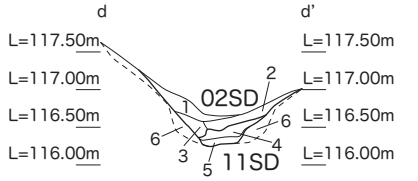
1, 10YR5/6 黄褐色シルト層　主体は1cm～2cmの礫。(地山)(12SXの埋土)
2, 岩盤表層剥離層、片岩の層理が観察できる。(地山)
3, 岩盤層、三波川帯の地層(白系の石英・片岩礫で構成される。)(地山)



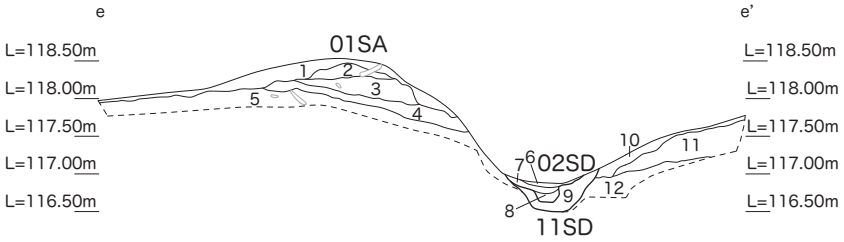
1, 10YR5/8 黄褐色シルト層　径0.5cm～1cm大の風化・軟化した岩石を多く含む。(11SDの埋土)
2, 7.5YR5/8 明褐色シルト層　1cm～3cm大の岩盤風化礫を少量含むが土壌化が進んでいる。(11SDの埋土)
3, 岩盤層、三波川帯の地層(白系の石英・片岩礫で構成される。)(地山)



1, 10YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調　径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。(02SDの埋土)
2, 2.5Y5/6 黄褐色シルト層　2cm大の風化礫を少量含むが、主体は粘性のあるシルト層で、10YR4/6褐色シルトを含む。(11SDの埋土)
3, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層　径1cm大の比較的硬い礫を多く含む。(02SDの埋土)
4, 10YR5/8 黄褐色シルト層　径0.5cm～1cm大の風化・軟化した岩石を多く含む。本層下部は明褐色を呈し1cm～3cm大の岩盤風化礫を少量含み土壌化が進んでいるが分層できない。(11SDの埋土)
5, 7.5YR5/8 明褐色シルト層　本層中の下層には岩盤層と同様の層理が認められ、極度に風化した岩盤層である。シルト化した部分も認められる。
6, 岩盤層、三波川帯の地層(白系の石英・片岩礫で構成される。)

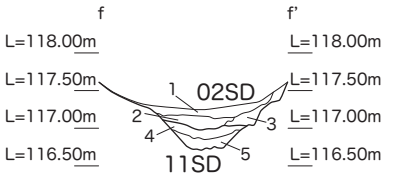


1, 10YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調　径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。(02SDの埋土)
2, 2.5Y5/6 黄褐色シルト層　2cm大の風化礫を少量含むが、主体は粘性のあるシルト層で、10YR4/6褐色シルトを含む。(02SDの埋土)
3, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層　径1cm大の比較的硬い礫を多く含む。(02SDの埋土)
4, 10YR5/8 黄褐色シルト層　径0.5cm～1cm大の風化・軟化した岩石を多く含む。(11SDの埋土)
5, 7.5YR5/8 明褐色シルト層　1cm～3cm大の岩盤風化礫を少量含むが土壌化が進んでいる。(11SDの埋土)
6, 岩盤層、三波川帯の地層(白系の石英・片岩礫で構成される。

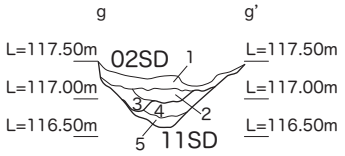


1, 10YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調　径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。(01SAの盛土の可能性あり)
2, 10YR5/6 黄褐色シルト層　2mm～10mm大の礫を主体的に含み、5cm～10cm大の礫を部分的に含む。(地山01SAの盛土の可能性あり)
3, 5YR5/6　明赤褐色シルト層・7.5YR5/6明褐色シルト層　径2mm～10mm大の礫(風化)を主体に、2cm～3cm大の礫を若干含む。(地山)
4, 10YR5/6 黄褐色シルト層　2mm～5mm大の礫を含む。(地山)
5, 7.5YR5/6 明褐色シルト層　基盤(岩盤)層　上面で風化が激しい、片岩の剥離層。(地山)
6, 10YR5/6 黄褐色シルト層　径1cm～2cm大の風化岩盤礫を多く含み、土壌化が進む。(02SDの埋土)
7, 2.5Y5/6 黄褐色シルト層　2cm大の風化礫を少量含むが、主体は粘性のあるシルト層で、10YR4/6褐色シルトを含む。(02SDの埋土)
8, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層　径1cm大の比較的硬い礫を多く含む。(02SDの埋土)
9, 10YR5/8 黄褐色シルト層　径0.5cm～1cm大の風化・軟化した岩石を多く含む。(11SDの埋土)
10, 10YR5/8 黄褐色シルト層　径1cm～2cm大の風化岩盤礫を多く含み、土壌化が進む。(地山)
11, 10YR5/6 黄褐色シルト層　径1cm～2cm大の風化岩盤礫が主体で、土壌化が進む。(地山)
12, 5YR5/8　明赤褐色シルト層　三波川帯の岩盤地山

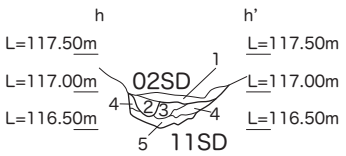
図 11　10A 区個別遺構断面図 1（1:100）



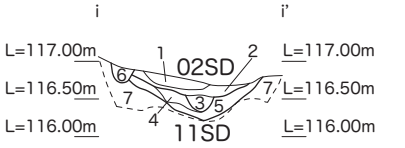
1, 10YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調　径2mm～10mm大の風化分解した礫片（石英・長石・片岩）を多く含み、5cm～10cm大の礫（片岩）を粗に含む。(02SDの埋土)
2, 2.5Y5/6 黄褐色シルト層　2cm大の風化礫を少量含むが、主体は粘性のあるシルト層で、10YR4/6褐色シルトを含む。(02SDの埋土)
3, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層　径1cm大の比較的硬い礫を多く含む。(02SDの埋土)
4, 10YR5/8 黄褐色シルト層　径0.5cm～1cm大の風化・軟化した岩石を多く含む。(11SDの埋土)
5, 7.5YR5/8 明褐色シルト層　1cm～3cm大の岩盤風化礫を少量含むが土壌化が進んでいる。(11SDの埋土)



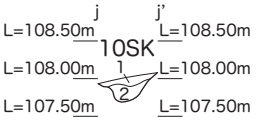
1, 10YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調　径2mm～10mm大の風化分解した礫片（石英・長石・片岩）を多く含み、5cm～10cm大の礫（片岩）を粗に含む。(02SDの埋土)
2, 2.5Y5/6 黄褐色シルト層　2cm大の風化礫を少量含むが、主体は粘性のあるシルト層で、10YR4/6褐色シルトを含む。(02SDの埋土)
3, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層　径1cm大の比較的硬い礫を多く含む。(02SDの埋土)
4, 10YR5/8 黄褐色シルト層　径0.5cm～1cm大の風化・軟化した岩石を多く含む。(11SDの埋土)
5, 7.5YR5/8 明褐色シルト層　1cm～3cm大の岩盤風化礫を少量含むが土壌化が進んでいる。(11SDの埋土



1, 10YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調　径2mm～10mm大の風化分解した礫片（石英・長石・片岩）を多く含み、5cm～10cm大の礫（片岩）を粗に含む。(02SDの埋土)
2, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層　径1cm大の比較的硬い礫を多く含む。(02SDの埋土)
3, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層　径2cm～5cm大の礫を含む。(11SDの埋土)
4, 10YR5/8 黄褐色シルト層　径0.5cm～1cm大の風化・軟化した岩石を多く含む。(11SDの埋土)
5, 7.5YR5/8 明褐色シルト層　1cm～3cm大の岩盤風化礫を少量含むが土壌化が進んでいる。(11SDの埋土)



1, 10YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調　径2mm～10mm大の風化分解した礫片（石英・長石・片岩）を多く含み、5cm～10cm大の礫（片岩）を粗に含む。(02SDの埋土)
2, 2.5Y5/6 黄褐色シルト層　2cm大の風化礫を少量含むが、主体は粘性のあるシルト層で、10YR4/6褐色シルトを含む。(02SDの埋土)
3, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層　径1cm大の比較的硬い礫を多く含む。(02SDの埋土)
4, 10YR5/8 黄褐色シルト層　径0.5cm～1cm大の風化・軟化した岩石を多く含む。(11SDの埋土)
5, 7.5YR5/8 明褐色シルト層　1cm～3cm大の岩盤風化礫を少量含むが土壌化が進んでいる
(11SDの埋土)
6, 撹乱層
7, 岩盤層、三波川帯の地層（白系の石英・片岩礫で構成される。）



1, 10YR3/4 暗褐色腐植土層
2, 地山、岩盤表層剥離層

図 12　10A 区個別遺構断面図 2（1:100）

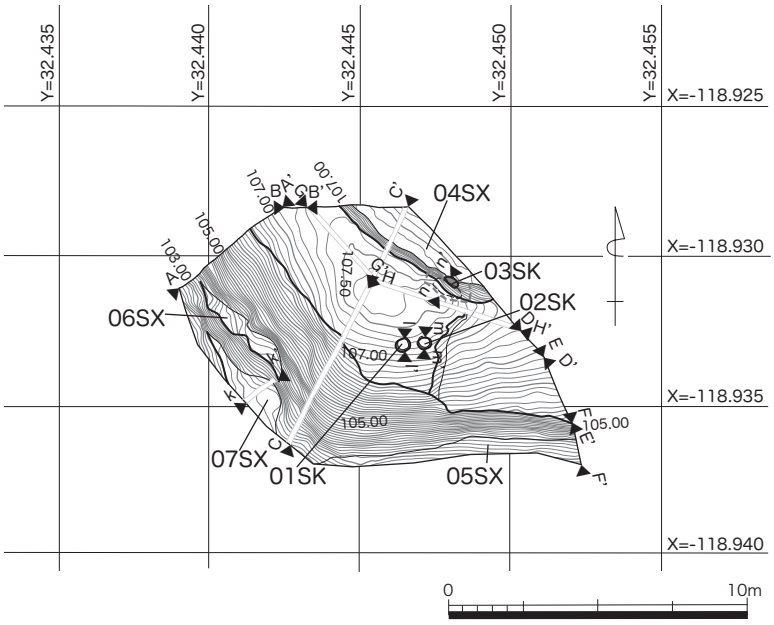


図 13　中山砦跡 10B 区（1:250）

D　D'
L=107.00m　L=107.00m
L=106.00m　L=106.00m

1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層
上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片
(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm～
10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)
部分的に岩盤層が露頭している。

A　A'
L=103.00m　L=108.00m
L=107.00m　L=107.00m
L=106.00m　L=106.00m
L=105.00m　L=105.00m
L=104.00m　L=104.00m
L=103.00m　L=103.00m
L=102.00m　L=102.00m

1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)　部分的に岩盤層が露頭している。

B　B'
L=108.00m　L=108.00m
L=107.00m　L=107.00m

1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)
部分的に岩盤層が露頭している。

E　E'
L=107.00m　L=107.00m
L=106.00m　L=106.00m
L=105.00m　L=105.00m

1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調　径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)
部分的に岩盤層が露頭している。

0　10m

C　C'
L=108.00m　L=108.00m
L=107.00m　L=107.00m
L=106.00m　L=106.00m
L=105.00m　L=105.00m
L=104.00m　L=104.00m
L=103.00m　L=103.00m
04SX

1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)　部分的に岩盤層が露頭している。

F　F'
L=106.00m　L=106.00m
L=105.00m　L=105.00m
L=104.00m　L=104.00m
L=103.00m　L=103.00m
05SX

1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調、径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)
部分的に岩盤層が露頭している。

G　G'
L=108.00m　L=108.00m
L=107.00m　L=107.00m

1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調　径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)　部分的に岩盤層が露頭している。

H　H'
L=108.00m　L=108.00m
L=107.00m　L=107.00m
L=106.00m　L=106.00m

1, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層　上位の腐植土層の影響でやや暗い色調
径2mm～10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm～10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2, 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)　部分的に岩盤層が露頭している。

図 14　10B 区セクション図（1:200）

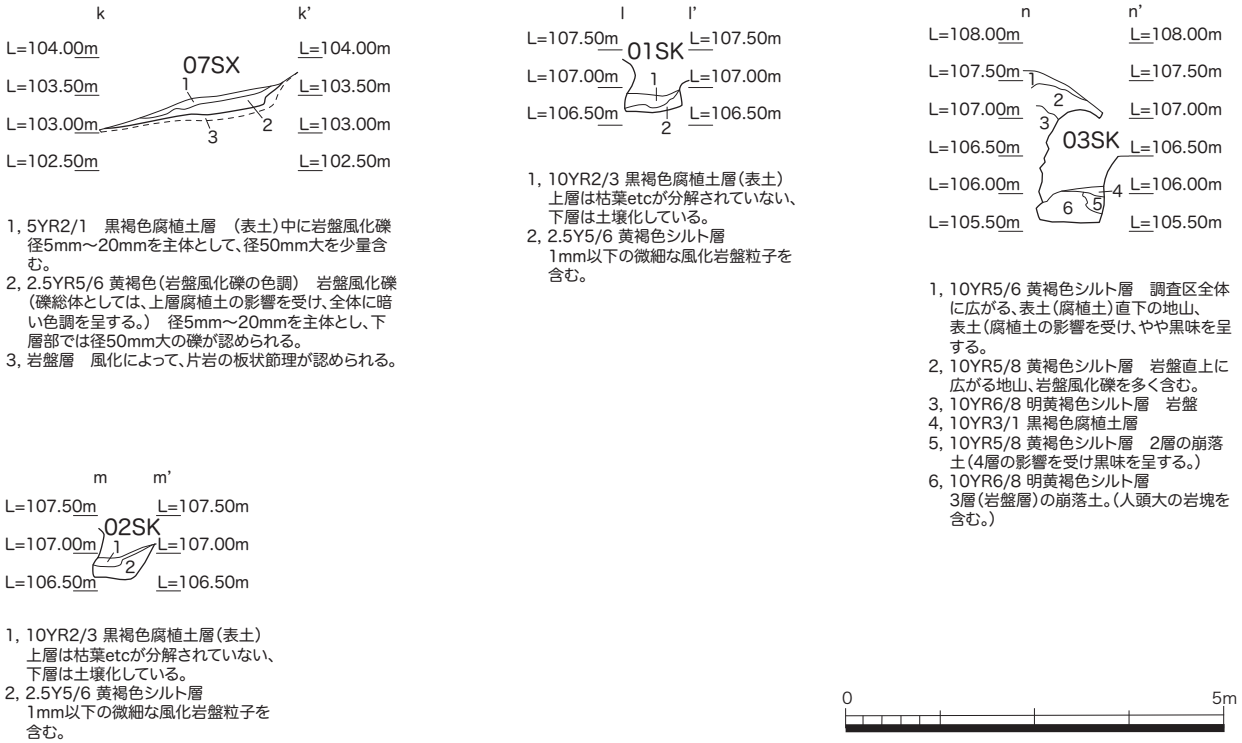


図 15　10B 区個別遺構断面図（1:100）

長径 8.5m、幅 1.4m、深さ 0.30m を測る。平場面は標高 104.00m 付近でやや谷がある南東に少し下がって傾斜していた。埋土は上層に表土である黒褐色腐植土があり、下層に黄褐色の岩盤の風化礫が堆積していた。

07SX：丘陵南斜面を平面菱形に削りだした平場で、長径 8.0m、幅 3.0m、深さ 0.30m を測る。平場面は標高 103.15m 付近でやや谷がある南東に少し下がって傾斜していた。埋土は上層に表土である黒褐色腐植土があり、下層に黄褐色の岩盤の風化礫が堆積していた。

第４節　鉄　鏃

出土遺物では、平面平根形の鉄鏃が１点のみ確認された。基部が折れているが、長さ 10.4cm 以上、刃幅 2.0cm、刃部厚み 0.3cm、刃の長さ 5.5cm あるもので、刃部に長さ 1.2cm、幅 0.5cm の菱形の透かし孔がみられる。基部は刃部側で幅 0.5cm、厚み 0.5cm を測る。この鉄鏃は、愛知県清須市朝日西遺跡の 16 世紀末頃の遺構から出土した鉄鏃と透かしの形は異なるが、形態が類似する。

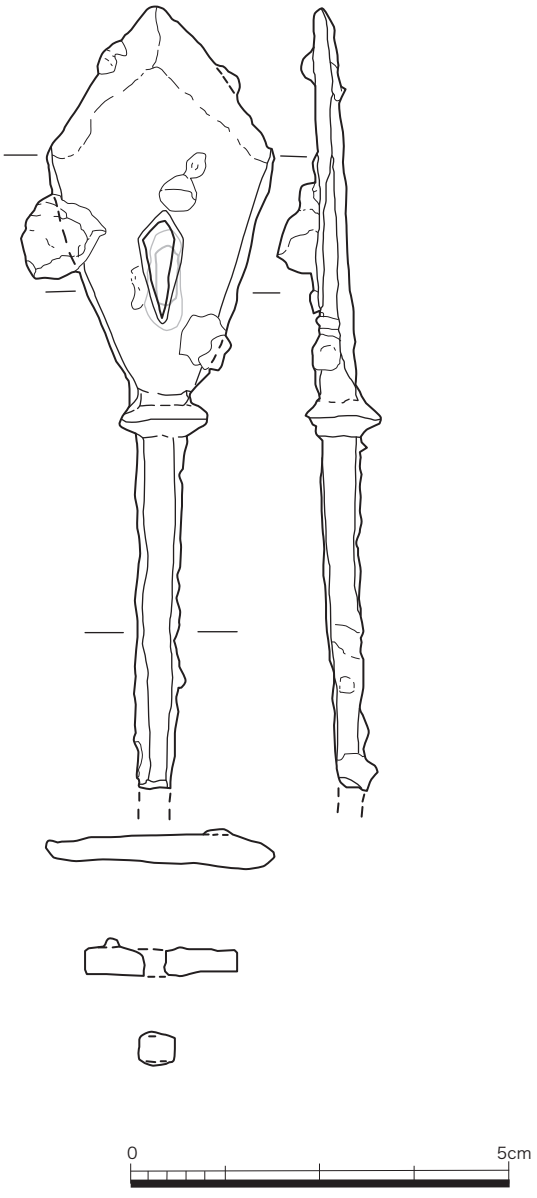


図 16　鉄鏃実測図（1：1）

第3章　総　括

第1節　中山砦跡の遺構について

愛知県教育委員会による中世城館跡の調査による縄張り図においても、10A区の丘陵尾根の堀切02SDと土塁01SAは記録され、猪垣と指摘されている。発掘調査においても、地表面から見えていた02SDは中央にある03SEの南北を掘り下げて（04SKと05SK）、03SKを落とし穴として利用した形跡が推定できた。この為、地表面から見えていた02SDは、土塁の01SAとともに猪垣として機能したものと思われる。しかし、02SDの下層部は、地表面でみられる形状とは異なり、断面「V」字状の溝となり、溝の北端部分を高さ0.50m程掘り残した土橋12SXを確認できた。また02SDの下で確認した11SD、これらに伴うと思われる01SAは、戦国時代の遺構の可能性が高い。遺物の出土や他の遺構との関連もないため、結論を出すことはできないが、02SDと11SDはほぼ同じ位置にあり、二つの可能性がある。一つは02SDと11SDは同時期（天正三年の武田軍）のもので、11SDを掘削した後、少し埋めて何らかの施設を設けた痕跡を02SDと考える可能性、もう一つは02SDと11SDは2時期の遺構と考えて、下層の11SDが天正元年の徳川軍のもの、02SDが天正三年の武田軍のものと考える可能性である。

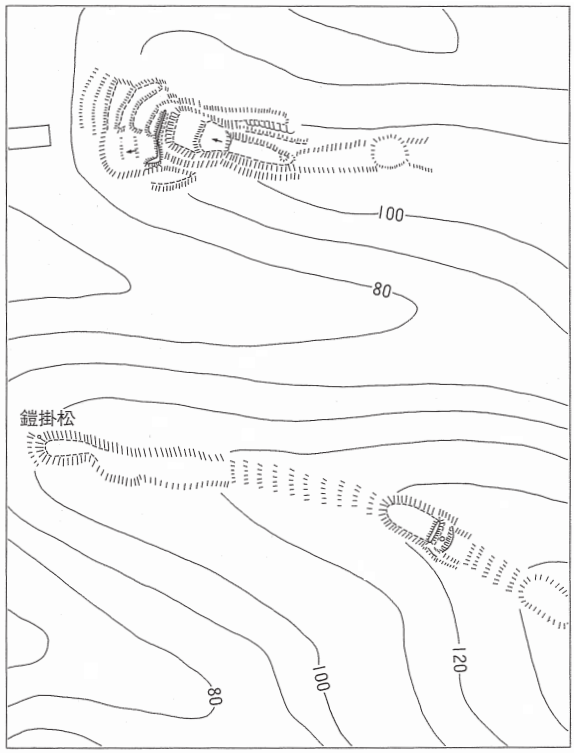


図17　中山砦跡縄張り図
（石川浩治氏作図、愛知県教育委員会1997『愛知県中世城館跡調査報告Ⅲ』（東三河地区）より転載）

その他の10A区の平場遺構06SX～09SXは、尾根に登るための道に伴う可能性があり、現在に近い時期の遺構と思われた。また、10B区で確認できた土坑3基01SK～03SKと平場遺構04SX～07SXがある。土坑01SK～03SKは地表面から確認できた現在に近いもので、04SXも地表面から確認できた点から、現在に近い新しいものと思われる。10B区の丘陵南斜面に確認できた05SX～07SXは地表面から確認できなかった遺構であるが、05SXは平場というより緩斜面であり、また06SXと07SXは平場であるが、埋土が表土の腐植土とは異なるが、あまり締まりがないものであったため、比較的新しい時期のものと考えられた。

以上の検討から、土塁01SAと堀切02SD・11SDは戦国時代の遺構と考えられたが、その他は近世以後の比較的新しい時代のものと考えられた。10B区の北側にある丘陵尾根の先端に、縄張り図において調査されている平場に土留めと思われる石垣がみられるが、川原石の円礫を積み上げたもので、現在に近いものと考えられる。このことも発掘調査で確認できたように、現在残る平場が比較的新しい時代に畑や植林などで造成された結果を反映したものと思われる。

第2節　中山砦跡出土の鉄鏃について

今回の調査において出土した鉄鏃は、有職故実などの研究から、野矢の鏃で尖根（尖矢）の平根のもので、尖矢は狩猟用の矢に用いるものと述べられている（中澤2006）。しかし、中山砦跡において出土した鉄鏃は、愛知県清須市朝日西遺跡から出土している鉄鏃と類似することから、長篠・設楽ヶ原合戦に伴う可能性が高く、戦闘に伴い使われたものと考えられる。

そこで東海地域において出土している室町時代後半・戦国時代（15 世紀～ 16 世紀）の遺跡から出土している鉄鏃と比較してその特徴を述べたい。

現在、愛知県内で確認できる室町時代後半・戦国時代（15 世紀～ 16 世紀）の鉄鏃は 7 遺跡から 27 点ある。清須市朝日西遺跡より 2 点、同清洲城下町遺跡より 7 点、稲沢市下津宿遺跡より 6 点、岩倉市御山寺遺跡より 4 点、名古屋市名古屋城三の丸遺跡より 1 点、瀬戸市桑下城跡より 1 点、同惣作・鐘場遺跡より 3 点、豊田市城山城跡より 3 点出土している。

岐阜県では 2 遺跡 9 点ある。関市重竹遺跡 A 地点より 15 世紀後半～ 17 世紀前半の時期のもの 4 点、県財団による重竹遺跡より中世とされる 4 点、土岐市妻木城土屋敷跡より中世のもの 1 点がある。

三重県では 6 遺跡 24 点ある。主に 15 世紀～ 16 世紀のもので、四日市市赤堀城跡より 1 点、伊賀氏阿山町杉田氏城跡より 1 点、津市東川遺跡より 1 点、桑名市志知南浦遺跡より 1 点、亀山市小野城跡より 1 点、津市多気遺跡群より 17 点ある。

この中で、中山砦跡出土の鉄鏃と同様に、刃部の平面形が先端側に幅広部がある菱形のものは、朝日西遺跡に 1 点（1）、城山城跡に 2 点（25・27）、惣作・鐘場遺跡に 1 点（24）ある。先に述べた朝日西遺跡の鉄鏃は 16 世紀末頃の遺構から出土しており、清洲城下町遺跡の一部とも考えられる遺跡であるので、織田氏と関係する氏族が統治した遺跡である。城山城跡は、豊田市足助町の北にある山上に築かれた城跡で、出土した鉄鏃も 16 世紀後半に今川氏方の在地勢力と徳川氏、武田氏が攻防を繰り返した要地に関連するものである。惣作・鐘場遺跡から出土したものは、報告においても時期と全形が明瞭ではないものである。

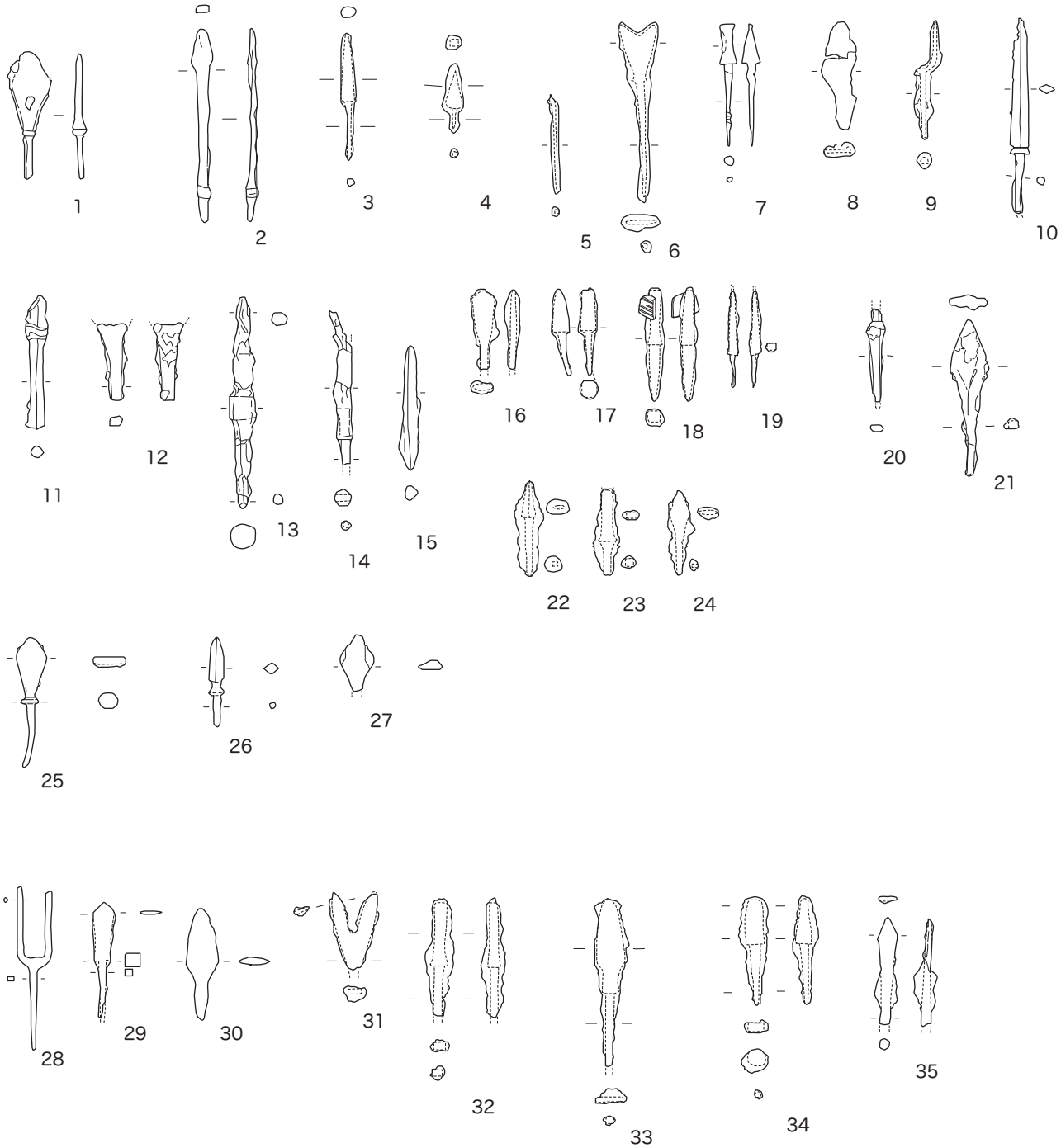
よって刃部形態が類似するものが、少数ながら室町時代後半以後・戦国時代の複数の遺跡で確認できる。透かしの形態等の詳細な部分を除けば、中山砦跡から出土した鉄鏃と同じ形態のものが、愛知県内では中山砦跡を含めて 4 遺跡から出土しており、一定の割合で存在した可能性が高いことを示すものである（中山砦跡出土例を含めて、8 遺跡 28 点中 5 点）。しかし、これまでの中世における鉄鏃の研究では、刃部の平面形態が、菱形（柳葉形）で幅広部が基部側にあるものが、15 世紀～ 16 世紀にあることが指摘されているが、中山砦跡で出土したような刃部の形態のものは紹介されていない（津野 1990、小林 1997）。中山砦跡で出土した鉄鏃のタイプのものは、戦国時代の愛知県における地域性を示す資料の可能性がある。

また、中山砦跡のタイプとは異なる鉄鏃の形態で、複数の遺跡でみられるものが 3 タイプある。一つは刃部の平面形が尖り根の先細りする形態で、刃部断面が方形から長方形のもので、清須市清洲城下町遺跡に 3 点（3・4・7）、岩倉市御山寺遺跡に 2 点（17・19）、瀬戸市惣作・鐘場遺跡に 1 点（22）、関市重竹遺跡に 1 点（34）、四日市市赤堀城跡に 1 点（36）、亀山市小野城跡に 1 点（41）、津市多気遺跡群に 1 点（57）ある。このタイプの鉄鏃は、東海地域に広く分布する。二つ目は刃部の平面形が二股のフォーク状の形態のもので、清洲城下町遺跡に 1 点（9）、関市重竹遺跡 A 地点に 1 点（28）、小野城跡に 1 点（41）、多気遺跡群に 14 点（43 ～ 48・50 ～ 52・54 ～ 56・58・59）あり、三重県の多気遺跡群に多くの類例がみられる。三つ目は刃部の平面形が基部側に幅広部がある菱形で平根のタイプのものは、清洲城下町遺跡に 1 点（8）、瀬戸市桑下城跡に 1 点（21）、重竹遺跡 A 地点に 1 点（30）、重竹遺跡に 1 点（33）、多気遺跡群に 1 点（53）があり、中山遺跡のタイプに近い平面形をもつもので、全国的にも類例が多いものである。

その他に付編において述べる長篠城跡史跡保存館に保管されている鉄鏃にみられるタイプとして、刃部の平面形が鏑のある細身の柳葉形のもので断面が方形から菱形の形状のものがある。発掘調査による資料においても清洲城下町遺跡に 1 点（10）、城山遺跡に 1 点（26）があり、戦国時代の特徴を示す形態のものと思われる。

第 3 節　まとめ

以上の調査成果により、長篠・設楽ヶ原合戦において、武田方の乗本五砦の一つとして文献資料の記録から知られていた中山砦跡について、戦国時代にさかのぼる可能性の高い遺構と当時の戦いに使用されたと考えられる鉄鏃を確認し、不十分な点は多いが記録に残る中山砦跡の姿の一端を表現できたものと思われる。これ



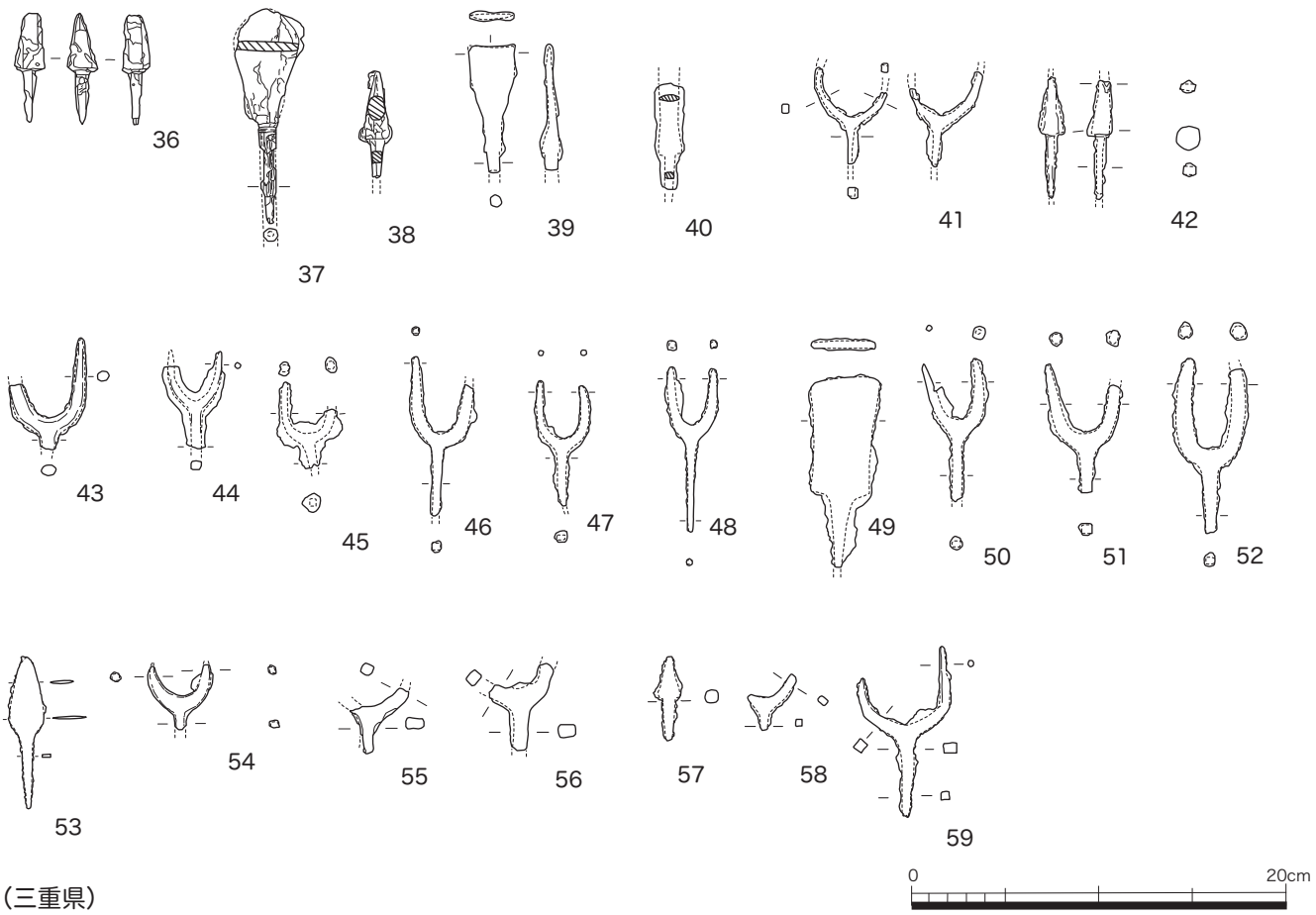
（愛知県）

1・2：清須市朝日西遺跡、3 ～ 10：清須市清洲城下町遺跡、11 ～ 15：稲沢市下津宿遺跡、
16 ～ 19：岩倉市御山寺遺跡、20：名古屋市名古屋城三の丸遺跡、21：瀬戸市桑下城跡、
22 ～ 24：瀬戸市惣作・鐘場遺跡、25 ～ 27：豊田市城山城跡

（岐阜県）

28 ～ 30：関市重竹遺跡 A 地点、31 ～ 34：関市重竹遺跡、35：土岐市妻木城士屋敷跡

図 18　戦国時代における東海地方の鉄鏃 1（1:4、実測図は各報告書の図を再トレース）



（三重県）

36：四日市市赤堀城跡 2、37・38：伊賀市阿山町杉田氏城跡、39：津市東川遺跡、40：桑名市志知南浦遺跡、
41・42：亀山市小野城跡、43・44：津市多気遺跡群、45 ～ 52：津市多気遺跡群Ⅱ、
53：津市多気遺跡群伝本願寺跡調査区、54：津市北畠氏館跡 7、55・56：津市多気北畠氏遺跡第 31 次（多気六田地区第 5 次）、
57・58：津市多気北畠氏遺跡第 32 次（多気六田地区第 6 次）、59：津市多気北畠氏遺跡第 34 次（多気六田地区第 7 次）

図 19　戦国時代における東海地方の鉄鏃 2（1:4、実測図は各報告書の図を再トレース）

らの成果が、多くの方々に検証され、今後の地域研究や戦国時代の研究に役立てられることを願いたい。

参考文献

津野仁 1990「古代・中世の鉄鏃」『物質文化』物質文化研究会
小林康幸 1997「中世鉄鏃研究ノート–合戦の鏃、そして儀杖の鏃–」『多知波奈考古』第 2 号、橘考古学会
梅本博志・安藤義弘編 1997『愛知県中世城館跡調査報告』Ⅲ（東三河地区）愛知県教育委員会
中澤克昭 2006「居館と武士の職能–出土鉄鏃と狩猟をめぐって–」『鎌倉時代の考古学』高志書院
報告書
（愛知県）
小澤一弘編 1992『朝日西遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 28 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴編 1994『清洲城下町遺跡Ⅳ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
都築　也編『島田陣屋遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 58 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴・宮腰健司他 2002『清洲城下町遺跡Ⅷ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集」財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財セン

ター
永井邦仁編 2005『城山城跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 122 集」財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
酒井俊彦編 2008『惣作・鐘場遺跡Ⅱ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 150 集」財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
武部真木編 2008『名古屋城三の丸遺跡Ⅷ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 161 集」財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
柴垣哲彦・桐山秀穂・鈴木恵介・町田義哉 2009『清洲城下町遺跡Ⅱ』「清須市埋蔵文化財調査報告Ⅱ」愛知県清須市教育委員会
石黒立人 2011『御山寺遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 167 集」公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
樋上　昇編 2013『下津宿遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 175 集」公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
小澤一弘編 2013『桑下城跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 181 集」公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
(岐阜県)
篠原英政他 1984『重竹遺跡−その 3−』「関市文化財調査報告第 8 号」関市教育委員会
中嶌　茂編 2002『妻木城−妻木城跡・土屋敷跡発掘調査報告書−』岐阜県土岐市教育委員会・(財) 土岐市埋蔵文化財センター
長谷川幸志・坂東肇・伊藤利巳編 2005『重竹遺跡・上西田遺跡・洞雲戸遺跡』「岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第 91 集」財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
(三重県)
春日井恒・上垣幸徳 1989『赤堀城跡２』「四日市市遺跡調査会文化財調査報告書Ⅵ」四日市市遺跡調査会
藤井尚登 1990『杉田氏城跡発掘調査報告書』「阿山町埋蔵文化財調査報告第 3 集」阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会
竹田憲治他 1994『六地蔵 A 遺跡・六地蔵 B 遺跡・高塚宅跡・東川遺跡』「三重県埋蔵文化財調査報告 116-1」三重県埋蔵文化財センター
竹田憲治・酒井巳紀子編 2008『志知南浦遺跡発掘調査報告』「三重県埋蔵文化財調査報告 288」三重県埋蔵文化財センター
長谷川哲也編 2010『小野城跡発掘調査報告−第 4・5・6 次調査−』「三重県埋蔵文化財調査報告 315-1」三重県埋蔵文化財センター
伊藤裕偉 1993『多気遺跡群発掘調査報告』「三重県埋蔵文化財調査報告 109」三重県埋蔵文化財センター
伊藤裕偉 1996 編『多気遺跡群発掘調査報告Ⅲ〜一志郡美杉村上多気字小津所在、伝誉永寺跡・伝本願寺跡の調査〜』「三重県埋蔵文化財調査報告 137」三重県埋蔵文化財センター
越賀弘幸編『多気遺跡群発掘調査報告Ⅱ』「三重県埋蔵文化財調査報告 136」三重県埋蔵文化財センター
小林俊之編 2004『北畠氏館跡 7−多気北畠氏遺跡第 21 次調査−』「美杉村文化財調査報告 10」三重県美杉村教育委員会
石淵誠人 2009『多気北畠氏遺跡第 31 次調査報告−上多気六田地区第 5 次−』「津市埋蔵文化財調査報告書 19」津市教育委員会
藤田充子 2011『多気北畠氏遺跡第 32 次調査報告−上多気六田地区第 6 次−』「津市埋蔵文化財調査報告書 23」津市教育委員会
熊崎　司・小川陽子 2012『多気北畠氏遺跡第 34 次調査報告−上多気六田地区第 7 次−』「津市埋蔵文化財調査報告書 30」津市教育委員会
熊崎　司 2013『多気北畠氏遺跡発掘調査報告−多気北畠氏遺跡第 35 次・上多気六田地区総括編−』「津市埋蔵文化財調査報告書 33」津市教育委員会

付 編　長篠城址史跡保存館保管の鉄鏃・鉄槍

第１節　はじめに

長篠城址は愛知県新城市（旧南設楽郡鳳来町）長篠にあり、天正三年（1575）における長篠城攻防戦の地として知られている。当時の合戦を伝える資料として、合戦に使用された鏃や槍の伝世資料や長篠城址付近で採集された鏃の資料が、長篠城址史跡保存館において展示・保管されている。今回は中山砦跡で出土した鉄鏃との関連やその歴史的性格を明らかにするため、長篠城址史跡保存館に展示・保管されている鉄製槍と鏃の資料調査を行った。以下に資料を紹介し、若干の考察をしたい。

第２節　長篠城址史跡保存館保管の資料

まず、長篠城址史跡保存館において保管されている資料の紹介をする（第１図）。

（1）鉄鏃　東照宮下賜　田原矢の根　銘　スケミチ（京都市生田君子氏所蔵資料）

1・2 は木箱に２本１組で納められている鉄製の鏃で、刃部の平面は幅が狭い柳葉形で基部側に抉りあるもので、中央に鎬がみられる横断面が菱形のものである。刃部の先端は実際に使用されたためか、先端部がやや丸くなっている。基部は細長く、横断面が方形になるもので、刃部の近くにタガネ彫りの「スケミチ」の銘がある。全体の大きさは１が長さ 15.75cm、重さ 12.3g、２が長さ 15.95cm、重さ 14.7g で、刃部の大きさは１が長さ 4.1cm、幅 0.9cm、厚み 0.6cm、２が長さ 4.2cm、幅 0.9cm、厚み 0.6cm をはかる。基部は 1・2 とも幅と厚みが 0.3cm 前後である。刃部には長辺に沿った研磨痕がみられる。鉄鏃の分類では、征矢の柳葉形のタイプになる。

（２）鉄鏃　本丸出土鉄鏃（林英太郎氏寄贈資料）

3.4 も木箱に２本１組で納められている鉄製の鏃で、刃部の平面は幅が狭い柳葉形で基部側に抉りあるもので、３は片面の中央に鎬がみられる横断面が三角形のもの、４が中央に鎬がみられる横断面が薄い菱形である。刃部の先端は、３は尖っているが、４は実際に使用されたためか、先端部がやや丸くなっている。基部は細長く、横断面が方形になるものである。銘はない。全体の大きさは、３が長さ 13.05cm、重さ 9.8g、４が長さ 13.00cm、重さ 10.6g で、刃部の大きさは３が長さ 2.9cm、幅 0.7cm、厚み 0.7cm、２が長さ 5.0cm、幅 1.0cm、厚み 0.3cm をはかる。基部は 1・2 とも幅と厚みが 0.3cm 前後である。鉄鏃の分類では、征矢の柳葉形のタイプになる。

（３）鉄鏃　（松力　哲氏提供資料）

５は刃部が刀子形の鉄製鏃で、全体に錆があり、先端部と基部が欠損している。全体の長さは 10.4cm、重さ 15.0g で、刃部の幅は 1.4cm、厚み 0.4cm、基部の幅 0.6cm、厚み 0.2cm をはかる。刃部の推定の長さは 8cm 程である。６は刃部の先端側がやや細長くなる柳葉形の鉄製鏃で、刃部の横断面は片面の中央に鎬のある扁平な三角形、基部の横断面がやや面取りされている八角形から円形である。全体の大きさは長さ 16.5cm、重さ 25.5g で、刃部の長さは 7.8cm、幅 1.2cm、厚み 0.4cm をはかる。基部の先端は径 0.4cm の球形に膨らむ形態になっている。

（４）鉄鏃　（鳳来町　林　栄太郎氏寄贈資料）

７・８は刃部が「V」字形の狩俣鏃で、８は基部を欠損している。７は全体の長さが 17.2cm、重さ 37.9g で、刃部の大きさは、長さ 7.65cm、幅 4.2cm、厚み 0.4cm をはかる。刃部は「V」字形の内側に刃が付けられており、刃部の先端から刃の奥行きは 3.8cm である。基部は横断面方形で、幅・厚みが 0.4cm 前後である。８は残存分の長さが 9.5cm、重さ 20.1g で、刃部の大きさは、長さ 6.3cm、幅 3.45cm、厚み 0.4cm をはかる。刃部は７と同様の形態で、刃部の先端から刃の奥行きは 3.1cm である。基部は横断面方形で、幅・厚みが 0.4cm 前後である。

（５）本丸出土鉄鏃（個人蔵）

９は重量が 69.0g あり、小型の槍の可能性もある刃部が柳葉形の鉄製鏃で、全体の長さが 17.1cm、刃部の大きさが長さ 9.6cm、幅 1.95cm、厚み 0.5cm 前

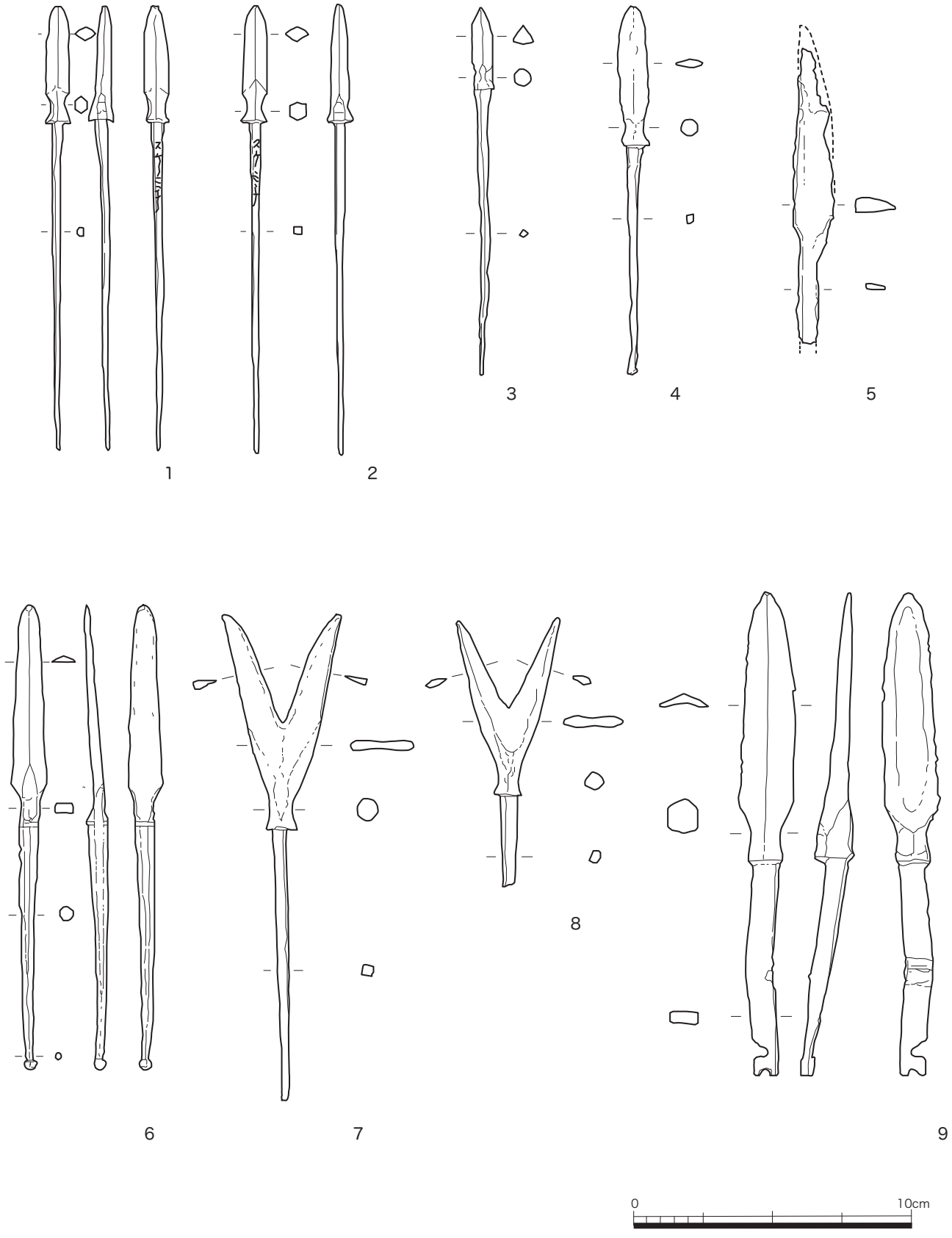


図 20　長篠城址史跡保存館保管の鉄鏃（1:2）

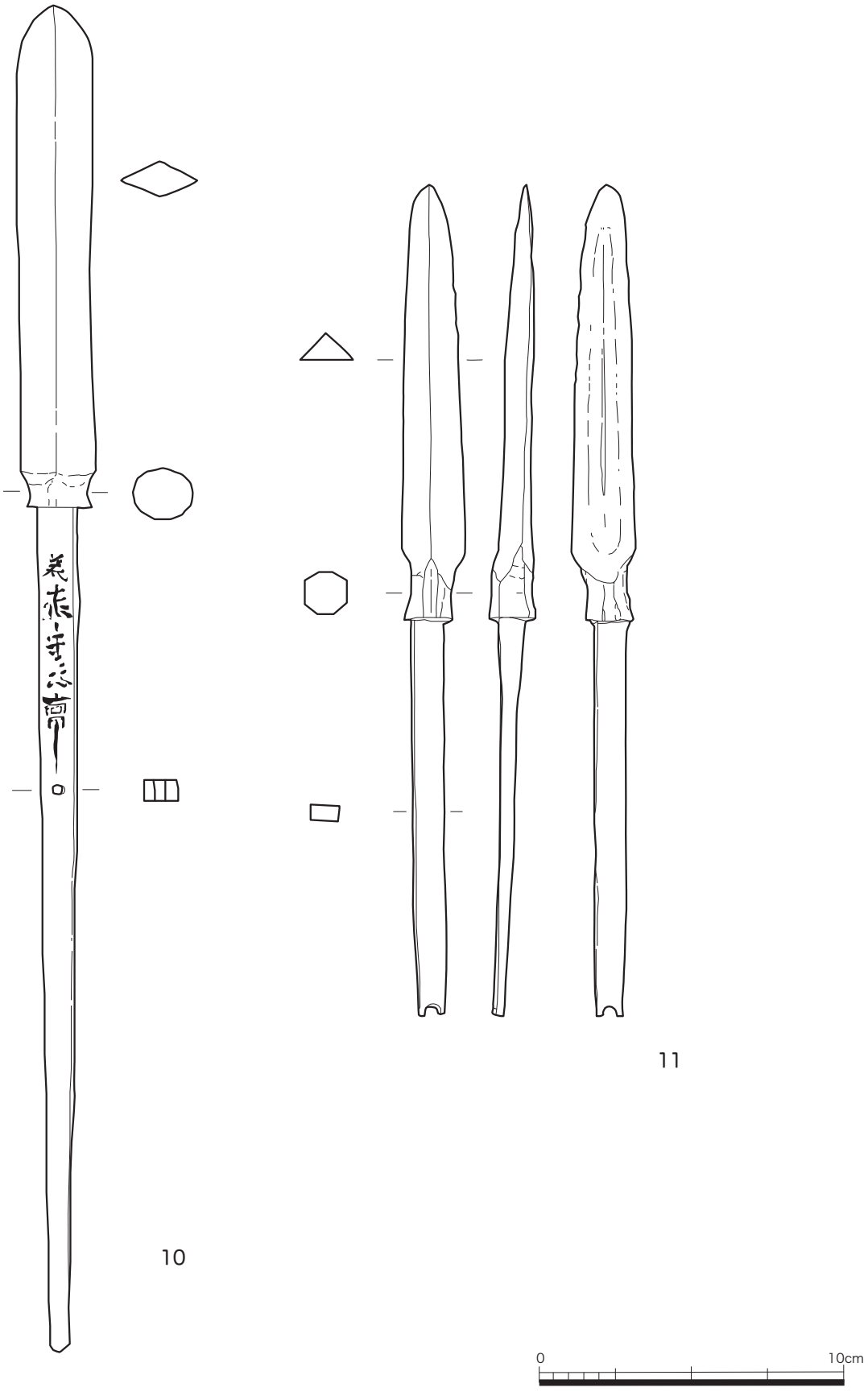


図 21　長篠城址史跡保存館保管の鉄槍（1:2）

後をはかる。刃部は片面に鎬があり、反対の面が内側に薄くなる形態となっている。基部は幅 0.9cm、厚み 0.6cm 前後の横断面長方形で、先端に半円形の抉りと隅丸三角形の抉りがあり、鏃を留めるためのものと思われる。基部の中央付近に右からの衝撃で少し屈折している。

（6）大通寺所蔵資料

10・11 は鉄製の槍で、刃部が柳葉形のものである。10 は全体の長さが 38.7cm、重さ 233g、11 は全体の長さが 23.9cm、重さ 97.8g である。10 の刃部は、長さ 14.4cm、幅 2.1cm、厚み 1.0cm の横断面中央に鎬がある菱形で、基部は幅 1.0cm、厚み 0.6cm の横断面長方形で、刃部側の片面に「美濃守忠ヵ常」のタガネ彫りの銘があり、その下に径 0.2cm 程の目釘穴がある。11 は刃部の先端側やや細くなる柳葉形で、横断面は片面の中央に鎬がある三角形で、刃部の大きさは長さ 12.5cm、幅 1.9cm、厚み 0.8cm 前後をはかる。刃部の鎬のない片面は中央がややへこむ形態である。基部は横断面長方形で、幅 0.75cm、厚み 0.4cm 前後をはかる。基部の先端に半円形の抉りがあり槍を柄に留めるためのものと思われる。

第３節　鉄鏃・鉄槍の特徴

今回の調査をした鉄鏃･鉄槍は､天正期における織田･徳川軍と武田軍において使用された可能性が高い資料で、戦国時代の槍が盛行した時代を反映したものと思われる。それでは、今回紹介した鉄鏃は、中山砦跡出土の鉄鏃とあわせて、鉄鏃自体の形態的特徴、その形態の組み合わせについて若干の検討をしたい。

今回紹介した１～４は、征矢の刃部が柳葉形の鎬作りとよばれる形態のもので、刃部の基部側が六面に面取りされて抉られ、関が再び太くなるものである。これらは同一型式と考えられるが、「スケミチ」銘の１・２は形態が類似するが、３・４は刃部の横断面や基部の長さなどで異なる。７・８は野矢の狩俣鏃で、鏑矢として使用された可能性もあるもので、この２点は形態も類似する。５・６は征矢に分類されるものと思っているが、５は片刃のもの、６が柳葉形の槍の刃部の形態に近いものである。９は刃部が柳葉形で、槍先になる可能性もある。第３章で述べた愛知県内において出土している室町時代後半・戦国時代（15 世紀～ 16 世紀）の遺跡から出土している鉄鏃では、７遺跡 27 点中で刃部の形態が分かるものが 16 点確認できた。その内訳は、清須市朝日西遺跡に平根の刃部が菱形のもの１点、刃部が鑿形から三角形の小さいもの１点、同清洲城下町遺跡より刃部の横断面が方形で平面形は細長い三角形である角根のものが２点､平根の「Y」字形のものが１点、横断面長方形の角根になる平面長方形の中央が抉れるものが１点、平根で長三角形状柳葉形のものが１点、鎬作りで細長い柳葉形のものが１点、瀬戸市桑下城跡から平根で平面菱形のもの１点、岩倉市御山寺遺跡から平根の平面五角形のもの１点、横断面が長方形になる角根で平面長方形のもの１点、瀬戸市惣作・鐘場遺跡から平根の平面菱形になるもの１点、豊田市城山城跡から平根の平面菱形のもの２点、平面柳葉形の鎬作りのもの１点がある。今回紹介した１～４は、城山城跡出土の鎬作りの柳葉形の鉄鏃と類似しており、遺跡の時期と遺跡をめぐる当時の政治情勢が長篠城跡と類似する点で興味深い。５～９は、愛知県内において同様な形態をもつものは知られていない。また、10・11 のような鉄槍は、管見に及ぶ中では確認できていない。

第４節　まとめ

以上の分析から、愛知県内の遺跡から出土した 15 世紀～ 16 世紀の鉄鏃の中で主要な形態は３タイプあり、中山砦跡から出土した刃部の平面形が先端部側に幅広部がある菱形で平根のもの、長篠城址保存館に展示・保管されている鎬作りの平面形が細い柳葉形のもの、横断面が長方形になる角根で平面形が長方形のものがある。この中で鎬作りの細い柳葉形のものは、津野氏による古代から中世の鉄鏃の研究では、14 世紀以後に鎬作りの鉄鏃が出現するようで、福井県一条谷朝倉氏遺跡で同様の形態のものがみられ、16 世紀後半の主要な鉄鏃形態と思われる。また７・８のような狩俣鏃は鎌倉時代以前から存在する鏑矢にも使用されるタイプのもので、鉄鏃の全体の構成の中では少数保有される野矢と思われる。刃部に様々な透かしが施されたものがみられるなど、貴重なものである。

資料調査に際して、長篠城址史跡保存館の山内祥三氏、新城市教育委員会の岩山欣一氏には大変お世話になりました。記して感謝の意としたい。

参考文献

津野仁 1990「古代・中世の鉄鏃」『物質文化』物質文化研究会
小林康幸 1997「中世鉄鏃研究ノート−合戦の鏃、そして儀杖の鏃−」『多知波奈考古』第 2 号、橘考古学会
梅本博志・安藤義弘編 1997『愛知県中世城館跡調査報告』Ⅲ（東三河地区）愛知県教育委員会
中澤克昭 2006「居館と武士の職能−出土鉄鏃と狩猟をめぐって−」『鎌倉時代の考古学』高志書院
報告書
小澤一弘編 1992『朝日西遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 28 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴編 1994『清洲城下町遺跡Ⅳ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
都築　也編『島田陣屋遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 58 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴・宮腰健司他 2002『清洲城下町遺跡Ⅷ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集」財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁編 2005『城山城跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 122 集」財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
酒井俊彦編 2008『惣作・鐘場遺跡Ⅱ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 150 集」財団法人愛知県教育･スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
武部真木編 2008『名古屋城三の丸遺跡Ⅷ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 161 集」財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
柴垣哲彦・桐山秀穂・鈴木恵介・町田義哉 2009『清洲城下町遺跡Ⅱ』「清須市埋蔵文化財調査報告Ⅱ」愛知県清須市教育委員会
石黒立人 2011『御山寺遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 167 集」公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
樋上　昇編 2013『下津宿遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 175 集」公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
小澤一弘編 2013『桑下城跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 181 集」公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

中山砦跡より長篠城趾を望む（南東より）

中山砦跡を望む（西より、写真左側に長篠城趾）

写真図版 2

調査前全景（上空より）

調査前の 10A 区全景（北より）

調査前の 10A 区全景（北西より）

調査前の 10A 区 01SA・02SD・03SK（東より）

調査前の 10A 区 01SA・02SD・03SK（南より）

調査区遠景（北西より）

調査区遠景（西北西より）

調査区上空より設楽ヶ原を望む（東より）

長篠城趾（南より）

調査区全景（南東より）

写真図版４

調査区全景（上空より）

10A 区全景（上空より）

調査区全景（南東より）

10A 区全景（北東より）

調査区全景（西北西より）

10B 区全景（東南東より）

10B 区全景（南西より）

10A 区中央付近から西側先端部（南東より）

10A 区西側部分（南東より）

10A 区全景（東より）

写真図版 6

10A 区 09SX（南東より）

10A 区西側丘陵先端部（南東より）

10A 区西側丘陵先端部の土層断面（南東より）

10A 区西側南斜面の土層断面（南東より）

10A 区西側北斜面・08SX（東より）

10A 区鉄鏃出土状態（西より）

10A 区東側部分、頂部は 07SX（西より）

10A 区 07SX（南東より）

10A 区 06SX・07SX(西より)

10A 区東端部分（西より）

10A 区東壁、丘陵上部から北斜面（西より）

10A 区 01SA・02SD・03SK（南東より）

10A 区 01SA・02SD・03SK（北より）

10A 区 02SD 完掘、11SD 検出状況（北西より）

10A 区 11SD、礫出土状況（南より）

10A 区 01SA・11SD（南より）

10A 区 01SA・11SD（北より）

写真図版 10

10A 区 03SK 掘削状況（東より）

10A 区 03SK 土層断面（南より）

10A 区 03SK（南より）

10A 区 04SK（南東より）

10A 区 05SK（北東より）

10A 区 05SK 土層断面（東より）

10A 区 06SX（西より）

10A 区 10SK（西より）

10B 区全景（南より）

10B 区全景（南より）

10B 区平坦面（東より）

10B 区 07SX（南東より）

10B 区 07SX（北西より）

10B 区東側の南斜面（東より）

10B 区 04SX（東より）

10B 区 02SK（南西より）

鉄　鏃

鉄　鏃（側面）

鉄　鏃（平面）

報告書抄録

ふりがな	なかやまとりであと
書　　名	中山砦跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第193集
編著者名	蔭山誠一
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2015年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
なかやまとりであと 中山砦跡	あいちけん しんしろし 愛知県新城市 のりもと 乗本	23221	773019	34度 55分 07秒	137度 33分 44秒	2010.6.7～ 2010.9.17	2,830㎡	第二東海自動車道横浜名古屋線建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中山砦跡	城館	戦国時代	土塁・溝	鉄鏃	天正三年(1575)五月の長篠城・設楽ヶ原合戦に伴う乗本五砦の一つ

文書番号	発掘届出(21埋セ第137号・2010.3.10)　通知(21教生第2580号・2010.3.23) 終了届・発見届・保管証(22埋セ第157号・2010.9.17)　認定(22教生第1538号・2010.10.12)

要約	本遺跡は天正三年(1575)五月にあった長篠城・設楽ヶ原合戦に伴う乗本五砦の一つとして、文献資料において記録されている遺跡で、今回の発掘調査による成果により、戦国時代の可能性が高い遺構と遺物を確認できた。当時の状況を解明する上で、貴重な資料になるものと思われる。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 193 集

中山砦跡

2015 年 3 月 31 日

編集・発行　公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷　新日本法規出版株式会社